

---

# 魔法少女リリカルなのは 転生した少年は少女達を護る

碧羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生した少年は少女達を護る

### 【Nコード】

N5627T

### 【作者名】

碧羅

### 【あらすじ】

事故で死ぬ人の代わりに死んでしまった少年  
そんな彼の前に現れたのは死神の少女！？  
え？心は天使だって？どうでもいいわ！！  
新しく命を貰うことになったが行き先はなんとルーレット  
しかも結果を見る前に転生とか：  
もう好きにしてくれ…

## 第一話 はじめまして、さようなら

番線に電車が参ります。白線の内側までお下がり下さい。  
繰り返します

駅でアナウンスが流れる。

言われた通り白線の内側 と言っても元から白線の外側にいない  
が まで下がる。

ふと隣にいた女性と目があつた。

とりあえず会釈すると女性も会釈を返してきた。

（綺麗な人だな…）

素直にそう思った。

整った顔立ちに長い黒髪、きつちり着こなしたスーツ。

（これから仕事かな？）

まあかく言う自分もこれから学校なのだが。

そうだ、学校に着いたら友達に自慢してやろう。

もちろん脚色をつけて。

そんなことを考えいると電車がすぐそこまで来ていた。  
あと数秒もすれば自分の目の前まで来るだろう。

そんな時だった。

隣にいた女性が前に出た。

待ちきれなかったとかそんなんじゃない。

女性の上半身は確実に電車に当たる場所にあった。

誰かに押されたんだろう。

彼女自身も驚いた顔をしてる。

このままだと人間のジャムが出来上がる。

もう誰も間に合わない。

皆呆然として彼女を見守った。

……何をしているのだろう。

気がつくと自分の手は彼女の手を握り、引き寄せていた。  
かろうじて電車が来る前に引き寄せる事に成功した。

が

今度は自分が彼女の立場になっていた。

力の反動というやつだ。

自分でも無意識にやっていたために下半身に力が入ってなかった。

横を見た。

電車の正面が目の前に広がって



## 第二話 この経験のおかげで今や電車嫌いに

「……………あれ？」

気がつくと駅のホームにいた。  
ちゃんと白線の内側にいる。

夢？

白昼夢というやつか？

いやはや嫌な夢を見たもんだ。

とつとと学校行つて寝直「夢じゃないですよ」やべえ口に出して  
たっぽい。気をつけなければ……………って

「……………夢じゃない？」

「いいえ。ケフィアです」

そんなネタ期待してねえよ。

「聞かれたら言いたくなりません？」

なるけど。

いやそれよりも。

「なぜ夢じゃないと決める」

夢で助けた女性のポジションには真っ黒のワンピースを来たツイン  
テール娘がいた。

俺のロリ魂に火がついた！

「このロリコン」

「最高の誉め言葉だ」

可愛いは正義。異論は認めない。

そんなことは置いといて。

「まあ先ほどの答えですけど、あなた死んからなんですよ」

..... what?

このロリは何を言ってるんだ？

「あなたが夢だつて言ったのは現実で、私は俗に言う死神だと言ってるんです」

「まてまてまてまてまてまて！死神だと！？聞いてないぞ！！」

「聞かれてませんもん」

「普通聞かねえよ！」

「あ！安心して下さい。心は天使の様に慈悲に溢れてますから！」

「じゃかましいー！！」

じゃあなんだ？さっきのは夢じゃなくて現実で、俺は死んだってことなのか！？

「さっきからそう言ってるじゃないですか」

てかちよくちよく心読まれてるし！

「つてことはここは？」

「三途リバー」

「川じゃねええええ!!」

「あ、そっちですか」

確かによくよく見ると俺達以外誰もいないし駅の外は真っ白で何も  
ないし！

ああ思い返せばあんなことやこんなこと……あれ？

何故だろう青春した思い出がほとんどない。

学校に行けばヲタ友達とデーパーな会話したり家に帰ればパソコン  
の前でアニメ見てゲームして……

「ろくな人生歩んでませんね」

「うるせえ!!」

どちらにせよこれでおしまいか……せめて親孝行ぐらいはしたかつ  
たな。

「言い忘れてたんですけど生き返れますよ」  
なん…だと？

「正直な話ここにくる人って本当はあなたが助けた女の人だったん  
ですよ。それなのにあなた自分で寿命縮めて……バカなの？死ぬの  
？」

「もう死んでます」

「そうでした」

バカはこいつでした。

「とにかく、俺は生き返れるんだな？」



「条件付きですけどね」

「条件？」

「はい。えーと……」

其の一 同じ世界には生き返れない

其の二 輪廻転生に基づき生まれ変わる

ですね」

「要するに別世界で生まれ変わると」

「YES」

まあ悪くないな。

親や友達に会えなくなるのは寂しいがこんな死に方不本意だし。

「それじゃこれ持って下さい」

「……ダーツ？」

ガラガラガラ……

なにやら車輪が回る音がするのでその方向を見る。

なんか自称死神のロリがでかいルーレット持って来てた。

え？なんかいきなり回し始めたけど？

「さあ！早く投げて！！」

「え？あ、ああ」

言われた通りに手元にあるダーツを投げる。

一応当たったもののまだ回転してるのでどこに当たったのか分から

ない。

それなのにこのロリ死神は

「はい！転生先が決まりました！」

「今ので！？」

「それじゃ凜々狩る本気狩る頑張ってください！！」

「なにそれ怖グフェ！！」

今度は体当たりされて白線の外側に出る。

一瞬の浮遊を味わうと共に聞き覚えのある甲高い音が聞こえた。

電車だった。

首を90度曲げると自分をこんな目にあわせた電車が目の前にあった。

ああ、決めたさ。

二度と電車に乗るもんか

## 第二話 この経験のおかげで今や電車嫌いに（後書き）

今回でプロローグは終わりです

気まぐれで更新するのでなにとぞご容赦を

次回、無印編はじまります

**第三話 無事転生！ え？それだけだけどなにか？（前書き）**

章はパソコンでしか作れないことに俺涙目

しかたないんでこのままいきます

### 第三話 無事転生！ え？それだけだけどなにか？

もすもすひねもす。

死んで転生した人だよ。

終わり！

すまんなかったことにしてくれ。

ちよつとしたネタのつもりだったんだ。

いざやってみるとめっちゃ恥ずかしいわこれ。

「シズく、これ教えてくれ」

「さっきの方程式を使えば楽だよバカ兄」

あ、シズって俺の名前ね。

たちはな しず  
橘 司守。

私立聖祥大附属の小学校に通う三年生。

まあ頭は高校生並みなんだけど。

そこ、バーロー言わない

「やべえよシズ…なんで小学生なのに分かるんだよ……天才だろ」

「あんたこそ高3の癖になんで中1の問題分かんないんだよ」

この俺の目の前にいるバカは橘<sup>たちはな</sup> 博士<sup>ひろし</sup>

一応俺達の兄貴分。

『俺達』ってのはこの『家』にいる全員ってことね。

この家 橘院は孤児院なのだ。

身寄りのない子、捨てられていた子。

そんな子供がここにはたくさんいる。

自分もその一人らしい。

なんか捨てられてたらしいけど覚えてないからなんも思わないし。

でもどうせなら人助けが趣味のケーキ屋のお姉さんに拾って欲しかったな。

二回死ねが口癖のツンデレ幼なじみがいると余計嬉しい。

「あ、バカ兄またシズに勉強教えて貰ってんの？

最年長の威厳ないね」

「バカ兄マジバカ」

「うるせえ！バカって言った方がバカなんだぞバカア！！」

「バカ兄……（慈愛の視線）」

因みにバカ兄というあだ名だが、最初は博士って名前から『はかせ』って言われたんだけどあまりにもバカなんで俺が『バカセ』って言うたらいつの間にかバカ兄になった。

にしてもだ。

まさか記憶までそのまま生まれ変わるとは思わなかった。

流石に生まれた時は覚えてないが。

おかげでバカ兄に勉強を教えられるし（嬉しくない）、学校では結

構モテるし（こっちは嬉しい）。  
こらそこ。ロリコン言わない。  
流石に小学生に手は出さんよ。  
五年後十年後に期待してるが。

「さてと……」

「待て！待つんだシズ！俺を見捨てないでくれええええ！！」

「俺が帰ってくるまでにこれ終わらせてね。答えは母さんが持つて  
るから」

ドンツと10cmの束を机の上に置く。

「orz」

勉強道具をカバンにしまう。

「兄貴を置いて女の子とデートとは……なんてヒドい弟だ」

「いくら教えても学習しないなんて……なんて（頭が）ヒドい兄だ」

後デートじゃないし。

勉強教えに行くだけだし。

「じゃ、行ってくるよ」

「おう」

気の抜けた返事で送られた。

イラッときたがこれ以上イジメるとかわいそうなので止めといた。

家を出る。

その時はまだあんな事件に巻き込まれるなんて、微塵も思いもしなかった。

「あれ？フラグ立てた？」



#### 第四話 このビー玉にはセンチメンタリズムな運命を感じられずにはいられない

「こりゃまー、珍しいビー玉なこと」

目的地に進む途中、普通よりも一回り小さいサイズのビー玉が落ちていた。

それを踏んでタンコブが出来たのは秘密だ。

それよりもこのビー玉。

これがまた不思議で見る角度、光の当て加減で色が変わるっていう。

「お！おお。すげえ！！」

端から見ればまるで不審者のごとく体を大げさに動かしてビー玉の色を変えている。

しょうがないだろ……小学生なんだから。

とまあそのビー玉を上に向けて遊んでいると

「いやー、いい拾い物し「きゃあ！」「あべし！！」」

誰がぶつかり、ビー玉が口の中にダイブ。

ゴクン。

ゴクン？ゴクン！？

「いたたた。すいません、だいじょ「ぶるあああああ！！！！」」



ほっとけばう　こと一緒に出てこないかな？

「あの〜」

そうだな、それに期待しよう。

念のため病院に「あの！」「はい！」考え事してて気づかなかった。

ついつい大声出しちゃった。

「……ってシズくん？」

「ん？あー、なのは……だっけ？」

「うん。高町なのはだよ」

立ち上がって声の主の方へ向くと茶髪の短いツインテール娘　高町なのはがいた。

個人的にはツインテールはもっと長い方が好きなのだが。

なのはのやや後ろにはアリサ・バニングスと月村すずかがいる。

さっきの金髪と青髪はこいつらか。

「わりい、クラス違うからよく覚えて無かった。そこのツンデレ以外」

「誰がツンデレよ！」

「自覚がある時点で自分だと気づけ」

ツンデレもといアリサは俺をライバル視（敵視？）している。  
何故だろう？なんて言うほど鈍感じゃないぜ。

俺とアリサは入学してからずっと100点しか取ってない。

その上俺の方が運動神経がいいからプライドの高い彼女は悔しいのだ。

前世の記憶を受け継いでるだけなのに……。 （享年17歳）

男の子だから運動神経いいだけなのに……。

「えーと、それより大丈夫？」

「え？」

「なにか大変だったんじゃないの？」

……。あ。

「……じゃった」

「え？ごめんもう一回言って」

「……飲んじゃった」

「なにを？」

「……ビー玉」

「ビー玉？」

「もしかしてさっきぶつかったとき？」

俺は無言で首を縦に振る。

「それって大丈夫なの？」

「こいつなら大丈夫でしょ」

アリサてめえ。

「ごめんシズくん！私のせいで」

「いや、俺の不注意のせい……」

「来て！」

いきなりなのはに引つ張られる俺。

てか痛い痛い！！

本当に小学3年かこいつ！

「ごめん！すずかちゃん！アリサちゃん！また明日！！」

浮いてる！俺浮いてる！

引っ張られて人が浮くなんてアニメか漫画でしか見たことないぞ！？

「ぬわーっ！っ！」

某父親の叫び声をあげながら引っ張られること数分。

何故か喫茶店の前で停止。

「お母さん！お父さん！居る！？」

ああ、両親がここで働いてるのね。

というかお客さん驚いてこっち見てるよ。

「どうしたのなのは？大声出して。お客さんに迷惑よ」

「う……ごめんなさい、お母さん」

お母さん！？この人が！？若っ！！

「あら、その子は？」

「そ、そうなの！実はかくかくしかじかで……」

「そう……困ったわね」

伝わるのか。

便利だなくかくしかじか。

「多分大丈夫よ。そのうち便と一緒に出てくるわ。保険証は持つて  
る?」

「いえ、持ってます」

「それじゃあお家に帰ったらお母さんかお父さんに病院に連れても  
らって」

「はい」

「ごめんなさいね、うちのなのはが」

「自分の不注意でもありますから気にしないでください」

「礼儀正しい子ね」。お詫びに好きな物食べて。なのはも何か食べ  
ていきなさい」

「え? いや、でも……」

「ほんと!? ありがとうお母さん! シズくん、あそこ座ろ!」

「ちよ、ま……」

「お母さん、私ショートケーキ!」

「はいはい、シズくんは何がいい?」

「……同じもので」

これはもう折れた方がいいな……。

なのはのお母さんは注文を取ると厨房の方へ向かった。

息を吐きながらイスに体重を乗せるとなのはがこちらを見ているの  
に気づいた。

「……何?」

「え? あ、えつと……ごめんなさい」

「ビー玉の事ならもう怒ってねーよ」

「それもあるけど……いかなり連れて来て迷惑だったかな、って……」

あー、そっち。

「別に気にしてないって。そりゃいきなり連れてこられてびっくりしたけどさ」

「本当に？」

「本当に」

「……えへへ、ありがとう」

なんだよ……笑うと可愛いじゃないの。

しばらくしてケーキと頼んないのに紅茶が運ばれて（サービスらしい）なのはとの会話を楽しんだ。

それからしばらくたち、夕方になり店を出ようとする。

「本当にお金はいいんですか？」

「ええ。言っただでしょう、お詫びだって」

「……ありがとうございます」

「いいのよ。またお店に来てね」

「バイバイシズくん」

「ああ。またな、なのは」

別れの挨拶をしてこの場を去る。

そして歩くこと数分、あることを思い出した。

「そーいや、あの子の家行くの忘れた……」

怒ってるだろーな……。

しーない。明日さっきの喫茶店でケーキ買って行くか。

そう思いながら俺は帰っていった。



第四話 このビー玉にはセンチメンタリズムな運命を感じられずにはいられない

なのは登場！

こんな感じで合ってますかね？

今回やたら！や？とか……が多かった気がするけど気にしない

次回からドンドン無印始めて行きます！

……多分

## 第五話 続かない日常

家に帰る途中、商店街の中で意外な人物と出会った。

いや、よくよく考えると意外でも何でもないな。  
むしろ居て当然のような気がしてきた。

「母さん」

「あら司守、今帰り？」

この人は我らが橘院の責任者でありみんなの母親。

橘 梢枝 しほえ

たった一人で橘院総勢17人の面倒をみるスーパーウーマンだ。  
晩飯の材料を買った帰りなのかスーパーの買い物袋を両手に持っている。

「うん。今日の晩飯は？」

「カレー」

「マジで？ やったね」

小さい方の買い物袋を母さんの手から取って持つ。

「カレーはたくさん作って置けば2、3日は楽出来るからね」  
「知ってるけど言われると何だかな……」

まあ母さんも大変だしな。

そんな他愛ない会話をしながら帰る。

「お母さん、司守、お帰り」

「ただいま。バカ兄は？」

「居間でダウン中。ミッション失敗」

「OK、スクラップの時間だ」

「ほどほどにしときなさいよ……」

「お母さん、晩御飯手伝うよ」

「ん、ありがと」

報告にあつた居間に行く。

するとどうでしょう。

机の上の紙の束は一枚も減っておらず、意識は夢の世界に旅立っているではありませんか。

まったく……しかたないな。

「最年少ブラザーズ!!」

「ヘイツ！呼んだかいシズ兄！」

「なんでも任せてくれ！」

「彼の者の動きを封じる縄と審判の羽根を……」

「合点承知！」

「心得て候！」

すぐに行動に移す最年少ブラザーズ。

あれで小学1年生っていうのが恐ろしい。

なんでその年で承知とか候とか知ってんだよ。

しばらくして最年少ブラザーズが持って来たのは縄跳びと羽根付きのペンだった。

「十分。その縄で動きを封じ、足の装甲を剥ぐのだ！」

「御意！」

「イエス、マイロード！」

だからどこでそんな言葉を覚えた。

縄跳びでの拘束をしても起きないバカ兄。

よろしい。トドメだ。

「その命、神に返しなさい」

「むう、なんかくすぐりたい……つてなにこれ！？動けにやあああ  
ああ！？ちよ、シズ、らめええええええ！！」

「晩御飯になるまでっ！君をくすぐるのをっ！止めない！！」

「あははははは！ちよつとマジで止めてええええええ！」

「それが逆にいいんだろ？」

「ほら、ここがいいのか？」

いつの間にか最年少ブラザーズまで参加してるし。

この子達の将来が心配だ。

一時間後

「ご飯出来たよ」

「ふう、いい汗かいた」

「働いた後の飯は楽しみだな」

どこのオッサンだ最年少ブラザーズ。

しかたないので縄跳びを解こうとすると

「うわぁ……」

バカ兄がアへ顔してた。

気持ち悪かった。

放置した。

その後は全員（・１）でカレーを食べて、風呂入って、何故か他の姉弟達も入って来て、すぐに上がって、宿題を終わらせて。

刺激はないけど、俺はそんな日常が好きだった。

ずっと続けばいいと思ってた。

大学生や就職するとみんな迷惑をかけないようにって出て行くけど、俺はここを継ごうかなって思う。

大変だろうけど何時までも母さんに頼れる訳じゃないし。  
今更だけどあのロリ死神に感謝したくなったな。

そんな小学生らしくない事を考えながら眠りについた。

だがそんな日常も長くは続かない。

夢を見た。

同じ年ぐらいの少年と化け物が戦ってる夢。

その非日常は彼にとって良いことなのか悪いことなのかは、まだ分からない

**第六話 関西弁のキャラって良キャラが多い気がする(前書き)**

ジョーカーしかりケロちゃんしかり

分かるかな？

## 第六話 関西弁のキャラって良キャラが多い気がする

学校帰り。

片手には翠屋で買ったケーキ。

向かうは我が家とは別の方向。

て言うかもう着いた。

目の前にあるのは二階建ての家。

ピンポン

…… 出ない。

ピンポン、ピンポン、ピピピピピンポン

何度チャイムを鳴らしてもこの家の主は出て来ない。

まさか居ないのか？

いや、きっとこの前行けなかったからいじけてるに違いない。  
困ったやつだ。

「居るのは分かつとるんや！大人しゅう出てこんか！！」

「質の悪い借金取りみたいな事すんなアホー！！」

バシィーン！と後ろからハリセンで頭を叩かれた。

「何だいるじゃないか」

「図書館に行つてただけやアホ」

後ろを振り向くと車椅子の少女が呆れた顔でこっちを見ていた。



あれ？ハリセンは？

「おいアホないだろ。誰がお前に勉強教えてやってると思ってるんだ」

「うつ……ごめんなさい」

分かればよろしい。

「ほら、ケーキ買ってきたから食おうぜ。お茶煎れてくれ」

「ほんま？ほなすぐ煎れるから入って」

「おう。邪魔するよ」

俺を横切って家の敷地内に入る少女。

この少女が大きな家の主でありたった一人の住人　八神はやて。

俺達が出会ったのは最年少ブラザーズが風邪を引いて付き添いで病院に行ったときだ。

待合室で診察が終わるのを待っていると、同じくらいの年の女の子が車椅子に座りながら読書をしているので話し掛けてみたのがキツカケだった。

年も同じだったからすぐに仲良くなれたし、家が割と近くだったから休学中の彼女に勉強を教えることも出来た。

「ほら、ショートとショート、どっちがいい？」

「それじゃ、こっちの……ってどっちも同じやん！」

彼女の両親はいない。

今は父親の友人の庇護を受けて生活してるらしい。

つまり、俺が家に来ない限り一人でいることになる。

だからなるべく行くようにしているが何分俺にも用事がある。

学校行ったりバカ兄に勉強教えたり家事を手伝ったりバカ兄に勉強教えたりバカ兄に勉強教えたり……。段々バカ兄に殺意沸いてきた。

「はあ……」

「どないした？ため息なんてついて」

「ちよつと俺の生徒の頭が酷すぎて……」

「悪かったなバカで！」

「はやてじゃねーよ。ウチのバカだよ」

「ああ司守くんのお兄さん？大変やね、年上に勉強教えるなんて」  
「まあな」

バカで通じるとかすごいな。  
流石バカ兄。同情するぜ。

それからケーキを食べ終わった後勉強を始めた。

勉強って言っても所詮小学生レベルなもんで教えるのも楽だ。

最もはやては物覚えがいいからどこまで楽できるか分からないが。

そしてあつというまに時間は過ぎて

「そろそろ帰らないとな」

「もうそんな時間？もうちよつとゆつくりできたらええのにな」

そうできたらいいのにねえ。

前に連絡するの忘れて遅くまでいたら鍵を閉められててしばらく夜の冷たい風を味わったからね……。

そんな訳で一緒に晩御飯を食べようとか泊まるうとかしない場合は暗くなる前に帰っている。

「悪いな」

「うっん、気にしとらんよ」

そう言っではやては笑う。

いつもの　そう、いつもの悲しい笑顔。

俺が帰るときはいつもこの笑顔だ。

だから俺は手を頭の上に乗せて、こう言う。

「じゃあ、またな」

「……うん」

そうしてちゃんとした笑顔を見せる。

手を離して家を出た。

また明日来よう。

明日が無理なら明後日、明後日が無理なら明後日来よう。

一日でも多く会えるように。

はやての笑顔がみれるように。

ああ、俺はきつとはやてが好きなんだなって思いながら帰路についた。

第七話 チート? いやいらないうってマジでいらなからそついつの必要ないか

主 人 公  
チート覚醒

第七話 チート？いやいらないうてマジでいらなからそういつの必要ないか

俺は今神社にいる。

何故かって？そこに神社があるからさ。

違うけど。いや違うないけど。

はやての家から帰る途中に神社がある。

俺はいつも長い階段だなー、って思いながら帰ってるんだけど今日は違う。

その長い階段を上っていった。

ああ長かったさ。小学生にはキツイよこれ。

下りもあるとか鬱になるよ。

それよりも理由だが二つある。

一つはビー玉。

出ないんだよなかなか。

医者の話しじゃ時間かかるって言ってたけど不安じゃん。  
だからせめてもの神頼みということ。

もう一つは幻聴だ。

はあ？なに言ってるの？バカなの？死ぬの？とか思っている奴もいるだろう。

事実なんだ。本当なんだ。

昨日学校帰りに公園の近くを通った時と夜にくつろいでいた時に。

助けて……助けて……って聞こえるんだぜ？

ホラーだぞ。

てな訳でお参りに来たのだ。

ホラ、俺って死神と会ったことあるじゃん？

だからほかの神様の加護も得られるかなーって。

賽銭箱に五円玉を放り投げる。

一度賽銭箱についてる縦棒に当たって入った後二礼二拍手一拝。

ビー玉が早く出ますように、幻聴が聞こえなくなりますように。  
あと家内安全と無病息災を祈ってっと。

さあ帰ろうと振り返ると

犬がいた。

大きな犬だ。大型犬よりも何倍もデカい。

そもそも本当に犬かどうか怪しい。

足下には悲鳴も上げられなかったのか、女性が倒れている。

「……………え？」

そんな状況の中、声を上げてしまった。

当然ほかの雑音などで遮られることなくその声は犬に届いてしまう。

犬がゆっくりとこちらを向く。

ヤバイー！！

4つの目が自分を捉えた瞬間、素直にそう思い林に向かって走り出した。

ただ走った。

ただ無闇に走った。

ただ逃げたいから走った。

ただ生きる為に走った。

しかし小学生と獣の速さは比べるまでもなく、すぐに追いつかれた。

「  
！！」

先程まで背中を向けていた相手はすでに目の前いる。

その巨大な体。4つの目。鋭い爪。牙の生えた顎。

恐怖が身体を支配し、微塵も動けずにいた。

死。

その単語が脳裏に浮かんだ。

死？死ぬのか？また死ぬのか？

ふざけるなッ！俺は死ぬために生き返ったわけじゃない！！

俺は今の暮らしが好きだ。生き返る前よりもずっとずっと大好きだ！！

だからこんなところで死んでたまるか！！

そう決意する。だが無駄だと知る。  
いや分かっている。

あんな化け物に人間が、しかも子供が対抗できるわけがない。

生と死。執着と諦め。決意と失望。  
それらが交錯した刹那

“うきながらだくめき”

“謳”が聞こえた。

どこかで聞いたことがある謳だ。

どこだ？漫画か？小説？アニメ？

少なくともテレビや友達との会話ではない。

自問自答している間にも謳は続く。

“艶なる息<sup>おき</sup>そに”

不穏な気配を感じ取ったのか化け犬が襲いかかって来た。

“契り籠<sup>こ</sup>ん！！”

謳が終わり“姿”が現れる。

同時に謳の正体を思い出した。



「ギャ！」

壁が化け犬の攻撃を防ぐ。いや、それは“円盤”だった。  
“一二枚の円盤”が壁の様に目の前に浮いている。  
円盤と自分の間には長い棒がある。  
それに触れようとして

「ちょっとアンタ！なにボーっとしてるのヨ！」  
「うお！」

喋った。

まあ俺の予想通りなら喋って当然なんだけど。

「えーと、チルルでOK？」  
「そうなのヨ。分かったならとっとと構えるのヨ！」  
「お、おう」

棒を持つと円盤が先端の左右に集まった。

どう見てもピコピコハンマーです。本当にありがとございました。

にしてもなぜ彼女が？  
チルル

彼女はエディルレイド  
ぶっちゃけ二次元の世界の人物のは  
ずなのだが。

まさか俺は二次元の世界にいたのか！？  
そうすればチルルのこともあの化け犬も納得出来る！  
ねえよ。

まさか二次元と三次元が合体したとか！？  
ねえよ。

どっちにしるヴォルクスはどうした。

「ガルルル……」

化け犬は距離を取りながら警戒していた。

若干忘れてた。どうしよう。

とりあえずハンマーの部分の何時でも振れるように背中に向ける。

……数秒、数分たったか分からなくなった頃化け犬がとうとう突っ込んで来た。

「うわぁ!？」

急な突進に思わずピコハンを降ってしまった。

ただ降った攻撃は当然避けられて今度はその鋭利な爪を向けた。

だがその爪も円盤によって防がれる。

「ナイスサポート!」

チルルに感謝しつつ化け犬を思いっ切り殴った。

モロに当たった化け犬は地面に叩きつけられながらも立ち上がりつつとする。

「させるかよ!!!」

その隙に一二枚の円盤全てが狙いを定めて飛んでいった。

化け犬はそれを受け止めることができず、円盤が帰ってくるころには力無く倒れていた。

「やったか……」

やべえこれ死亡フラグじゃね？と思ったがまた襲ってくる様子はなかった。

これで一安心、かと思いきや化け犬から青い宝石が出てきた。なぜかローマ数字で『？？』と書かれている。  
なんぞこれ？

「ああ、なるほどなのヨ」

どうやらチルルは知ってるみたいなので聞いておく。

「あれはジュエルシード。無闇にいろんな生き物の願いを叶えるやつかいな物なのヨ」

「いろんな……って人間意外もか」

「そうなのヨ。だからまた発動したらやつかいだから封印するのヨ」  
「封印ってどうやって？」

「イメージなのヨ」

「イメージ？」

チルルがピコハンから人型になる。

ロリな体系に金髪のツインテール。髪留めはピコハンの円盤と同じ形をしている。おまけにハートの飾りが付いた帯。

彼女こそ人間よりはるかに長寿で人間との“同契”により武器化できる存在  
エディルレイド。

前世の記憶によれば漫画の世界の話しなんだが……。

「事実、アタシもアンタのイメージから作られのヨ」

ほらやつぱり違……なん……だと？

「アタシの正体は“グラント”。所持者のイメージを形に変える、つまりは持ち主の願い事を叶える道具なのヨ。今の姿はアンタの強い盾をイメージした姿なのヨ」

「質問がいくつかある」

「なんなのヨ？」

俺は混乱した頭で冷静に質問を導き出した。

「一つ目、俺は盾をイメージしていない」

「正確には生きる執着心なのヨ。生きたい決意は自分を守ること、守るものといえば盾。つまりは間接的に盾をイメージしたわけなのヨ」

「二つ目、お前は“チルル”じゃないのか？」

「“チルル”なのヨ。ただし、イメージで作り出された“チルル”だからオリジナルの“チルル”じゃないのヨ」

「三つ目、お前はジュエルシードってやつと何が違うんだ？」

「全然違うのヨ！アレは人間でも動物でも願えば望まなくても叶えてしまうのヨ。その点アタシは所持者が強く願わないと発動しないから危険度が全然違うのヨ」

「四つ目、俺はそんなもん持ってない」

「持ってるのヨ」

「どこに？」

「身体の中」

「は？」

どゆこと？

「一昨日、アンタがビー玉と勘違いしたやつなのヨ」

あの綺麗なビー玉か。  
ん？確かアレって……

「飲み込んだじゃったハズじゃ……」

「そうなのヨ。しかももう身体の一部として吸収されちゃったから取り出せないのヨ」

「ええええええええええ！？」

つまり消化（？）されたってことかよ！？  
しかもチート化してるし！

「分かったなら早く封印するのヨ」

「はあ……分かったよ、なんか封印するものイメージすればいいんだな？」

あー……まだ頭混乱してる……。

取りあえず封印するものといったらチルル繋がりではアレしかないだろ。

目を閉じてイメージする。

なるべく細部まで思い出していると、ふと右手の甲あたりに違和感が生まれた。

目を開けると籠手のようなものが腕に付いていた。

丸く飛び出ている部分を逆の指で引っ張ると意味不明な文字が書かれた符が出てくる。

これは封煌符。

本来の使い方はエディルレイドを封印する為だけにイメージ云々言  
つたのでエディルレイド以外も封印出来るようになってる……は  
ず。

兎にも角にも封煌符でジュエルシードとやらを巻きつける。

勿論手動でグルグルと。

漫画みたいに投げたら巻き付いてるとか出来るわけないだろ。

「これで封印出来たか？」

「力は弱まっているけどまだ不完全なのヨ」

マジかよ。

やっぱ真名使わないとダメか。

「ジュエルシードナンバー??……」

いったん区切って深呼吸する。

そして、叫ぶ。

デス・リヘルター  
「煌縛鎮!!」

符が一瞬光り、地面に落ちる。  
今度こそ封印出来たみたいだ。

「別に叫ぶ必要なかったのヨ」

「気分だよ！突っ込まないでくれ」

封印したジュエルシードを回収しに行くにあの化け犬はいなくなっており、変わりに普通の子犬が横たわっていた。

「ジュエルシードはこの犬に取り憑いていたのヨ」

子犬に触ってみると暖かく、息をしていた。  
よかった、生きてる。

子犬を抱き上げながら一緒にジュエルシードも回収する。

……持っていたくないけどほっといたら危ないしな。

「さて、回収したらとつとと行くのヨ」

「別にそんな急がなくてもいいだろ」

「誰か来るのヨ」

そういえばチルルって感知機能付きだっけ。

いや、でも今の戦闘見られたわけじゃないし困らないと思うけど？

「相手は多分……管理局なのヨ」

「管理局？」

「詳しい説明は後なのヨ。今言えるのは捕まったら二度と朝日は拝めなくなるのヨ！」

「怖ッ！なんで!?!」

「それだけアタシがレアなのヨ。さあ、早くするのヨ!」

なんか物騒な組織だな。

こういうときはとつとと逃げるに限る！

…

……

……

橘 司守

高町 なのは

……

……

…

「ここのはず……だよね？」

「うん、間違いない。微かにだけど魔力が残ってる」

わたしとフェレット……じゃなくてユーノ君はジュエルシードの発動を感じて神社に来ただけと……

「いないね」

「戦闘の痕跡がある。きっと誰かが戦ったんだと思う」

林側に進むと地面が抉られた様な後がありました。

どうやったらこんなこと出来るんだろう？

「やっぱりその人も魔導師なのかな？」

「分からない……仮にそうだとしたら魔力の残留が少な過ぎる。この量だとジュエルシードの発動時に出る魔力とほぼ変わらない」

「素手で戦ったとか？」

「アレを素手で倒せると思うかい？」

無理かも……。

レイジングハートの力を借りてもスッゴク大変だったもん。

「倒せたとしても大怪我をしてるはずさ。でもここには血が一滴も落ちてない」

じゃあどうしたんだろう？

ここに来るまでに会った人と言えば気絶してたお姉さんだけだし……。



「取りあえずこの辺りを一回りしよう。もしかしたら何か分かるかもしれない」

「うん、分かった」

ユ一ノ君を肩に乗せて歩き出す。  
本当に誰がやったんだろう？

## 第七話 チート？いやいらないうってマジでいらなからそついうの必要ないか

碧羅（以下碧）「作者とー」

司守（以下司）「主人公のー」

碧&司「チート大図鑑ー！」

ワーワードンドンパファパー

碧「これは作者がマイナーでもないけど有名でもない作品の技・道具・ネタを使用するので主人公が使ったチート能力を紹介するコーナーです」

司「いや有名の使えよ！？」

碧「ハッ！何を言っている？二次創作だから使いたいネタを使うに決まっているだろう！？」

司「駄目だこいつ……早くなんとかしないと……」

碧「早速紹介しますぞー」

### 【名前】

チルル（ティクル＝セルヴァトロス）

### 【原作】

エレメンタルジェレイド

### 【能力】

武器化 形状ピコピコハンマー

一二枚の円盤を操る

### 【その他】

エディルレイドと呼ばれる人間との同契（リアクト 契約みたいな

もの）により武器化できる種族

基本的に現代兵器じゃ歯が立たない

チルルは盾属性（ジン＝ディフェンダー）で防御に特化している

口癖は「ゝのヨ」

原作では使い手であるヴォルクスにベタベタ

感知の能力があるが本来はエディルレイド限定

#### 【名前】

封煌符

#### 【原作】

エレメンタルジェレイド

#### 【能力】

エディルレイドの封印

#### 【その他】

主にエディルレイドハンターであるヴォルクスが使用

そのまま使用出来るが特別な訓練を受けたエディルレイドには効かない

ただし真名を使えばこの限りではない

使用者の実力次第ではエディルレイドの能力を封印したり半永久的に眠りにつかせることが出来る

司「なぜこれを最初に出した」

碧「チルルは防御中心だから素人のお前でも使えと思って。封煌符は他に封印出来るものと思い付かなかったから」

司「あるだろ！？パンドラハーツのレイヴンとか」

碧「でもアレって詳しい能力わかってないじゃん」

司「まあそうだけど……」

碧「後チルルの感知能力だけどエディルレイドなんていないから魔力に反応するようにしました」

司「それじゃこころで」

碧「またいつか」

## 第八話 姉萌えは二次元に限る

「なあ」

「なんなのヨ？」

「お前何時までいんの？」

子犬を気絶してる女性の側に置いて神社を脱出した後隣のチルルに当然の質問を投げかけた。

「別にアンタが望めば消えるのヨ。アタシはアンタのイメージによって作られたんだから」

うーむ……よくわからん。

「でも消えるのを望むってのはな……」

「別に存在を消すわけじゃないのヨ。また出てくることも可能なのヨ」

「そついうなら……まあ試しに」

消えろと念じてみる。

そうするとチルルは徐々に透明になって、消えた。

出て来いと念じてみる。

今度はさっきと寸分変わらない体勢でチルルが現れた。

「なんか……すげえな」

「やっとアタシの凄さが分かったのヨ？」

チルルが無い胸を張りながらドヤ顔してきた。  
なんかウザかったので話題を変えることにした。

「そついや管理局って何なんだ？」

さつき説明された限りじゃ物騒な組織みたいだけど。

「本当は時空管理局って言うのヨ。面倒くさいから管理局って言うけど、次元世界全体を管轄する為にできた組織なのヨ」

「次元世界？」

なんかいきなり大規模な話になったな。

「この世には複数の世界があつてそれらを管轄、調査する組織、それが管理局なのヨ」

「名前がそのまんまなのとすげえデカイ組織ってのは分かったけどそれがなんであそこに来たんだよ」

「アタシ……グラントやジュエルシードってのは危険な代物だからなのヨ」

まあ確かに子犬をあんな物騒な姿に変えたり願いを何でも叶えることが出来るなら時と場合によっちゃ危険だよな。

「時には世界を滅ぼすほどの力を持った道具。そんな物をほついたら危ないから管理局で保管する為に回収してるのヨ」

「……オイ、今とてつもなく危険な言葉が聞こえたぞ」

「心配しなくてもいいのヨ。ジュエルシードは単体じゃそこまでの力はないし、ちゃんと封印してれば大丈夫なのヨ。アタシに関してはアンタが望まなければいいだけなのヨ」

本当に大丈夫かな……。  
なんかかなり不安になってきたぞ……。

「今からでも自首して身体調べてもらうか……」

「ダメなのヨー！！」

「痛い痛い痛い！痛いから噛むな！」

いきなり頭に噛みついてきやがった！  
チルルってこんなキャラだったか！？

「出てったから何日も身体いじくりまわされた挙げ句に最悪殺されるかも知れないのヨ！？」

「流石にそれは……」

「無いとは言い切れないのヨ！せつかく……」

そこで俺はチルルの様子に気づいた。  
もしかして……泣いてる？

「せつかく……まともな人間に使われると思ったのに……」

そうだよな。普通こんな道具手に入れたら自分の私利私欲の為にしか使わないよな。

道具とはいえ意志があるんだ。

当然辛いことや悲しいことがあつたよな。

そればかりの思い出なんて嫌だよな。

「分かったよ……管理局には自首しない。だから泣くな」

「な、泣いてなんかないのヨ！」

「はいはい」

「なんなのヨその返事はー！」

チルルをからかいながら我が家へ帰っていると制服を着た見覚えのある後ろ姿が見えた。

あの背中……

「悪いチルル、ちょっと消えてもらっていいか？」

なんか言い方がアレだな……。

「？ 分かったのヨ」

了承を得てから消えるように念じる。  
完全に消えたのを確認してからその背中を追った。

「カサ姉！」

走りながら名前を呼ぶと彼女振り向いた。

腰まである黒のストレートに整った顔立ちは綺麗というよりも可愛いと言った方が適してる。

そしてなによりそのスタイル。

出ているところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。

まさしくボン、キュツ、ボン。

女性達から羨ましがられるスタイルと美貌を持った彼女の名前は橘

かさね  
暈音。

そんな通称カサ姉の性格だが

「司守！今帰り？一緒に帰ろ？」

ぎゅ~~~~。

「カサ姉苦しいって……急に抱きつかないでよ」

……重度のブラコンである。しかも俺限定の。

別に抱きつかれるのは嫌いじゃないよ？むしろ嬉しいよ？

なんてったってこのおっぱいを独り占めできるんだから。

フヘヘ……。

おっと危ない危ない。

危うくキヤラ崩壊するところだったぜ……。

恐るべしおっぱい。

「ごめんね。手、繋ご？」

カサ姉が手を伸ばす。

俺も手を伸ばして繋ぐ。

カサ姉は、俺の命の恩人だ。

俺が再び目を覚ました時に初めて見たものは雨だった。

ダンボールらしき箱の中に毛布にくるまれていた。

自分が赤ん坊だったからか、毛布が水を吸っていたからか分からないが体が動かなかった。

いきなり生死のピンチに絶望していると小学生ぐらいの傘をさした女の子      当時9歳のカサ姉が自分を覗き込んでいた。

カサ姉は悲しそうな、懐かしそうな顔をした後、俺を抱き上げて橘院に連れてこられた。

それから橘院で育てられることになった。

それからは何故かサカ姉が付きつきりでお世話してくれた。

今でこそただのブラコンで済んでいるが恐らく俺がまったく動かなくてもずっとお世話してくれるだろう。



ここまでくるとブラコンよりヤンデレに近いものを感じるな。

「はやてちゃんの家に行ってたの？」

「前回行けなかったからね。お土産持って行っただ」

「偉いね、司守は」

そう言っただけで空いてる手で頭を撫でられる。

余談だがはやての家に行く日はだいたい決まっている。

基本2日に一回勉強を教えに行っている。

それとは別に出かけたりする予定を作ったりもしているが。

もちろん学校の友達を疎かにはしてないぞ。

もつともはやてほど仲のいい友達はいないけど。

いるとしたらアリサぐらいか。

「そういえばバカ兄は？」

カサ姉とバカ兄は同じ学校に通っている。

流石に毎日ではないがカサ姉はバカ兄と帰ることがある。

カサ姉は人見知りであり他人と話をしたがらない。

つまり友達がいけないのだ。

ということで必然的に学校で話すのはバカ兄だけになり、一緒に帰るのもバカ兄になる。

「なんか用事があるってどこかに行ったよ。晩御飯はいらないって言ってた」

「ふうん……」

珍しいな、バカ兄がそんな遅くまで出てるなんて。

バイト（コンビニ）は土日だけだし夜勤なんて滅多にないし。

ま、気にする程でもないか。

…

……

……

橘 司守

橘 博士

……

……

…

「おう！お帰り司守、暈音ヴァッハ！！」

予定よりかなり早く帰った後から帰ってきた二人を迎えた瞬間司守のドロップキックをくらった。しかも鳩尾に。超痛え。

「晩飯いらねえんじゃないのかよバカ兄」

「ゴッホ、ゴッホゴホゴホ……早めに終わっただんだよ……あー……痛え……」

うえ……飯食ってないのに吐き氣してきた。

「おい司守お前……っていねえ！？」

「着替え来るって部屋に行っただよ」

「つたく、司守はもつと俺を敬うべきだ。  
暈音には優しくして行くせに。」

「確かに俺はバカだけど取り柄の一つや二つ持ってるんだぞ！」

「ねえ博士」

「割とポジティブな考えをしてると暈音が話し掛けてきた。」

「見つかったの？」

「……………」

「ああ、見つかった。残念なことにな」

「そう……………」

「しかも幾つかあるぞ。最低でも10はあるはずだ」

「……………」

「暈音は黙る。」

「当然だろう。爆弾に等しいものがこの町の至る所にあるのだ。  
家族がその被害にあつたら……………」

「全部見つけられそう？」

「誰かも“こいつ”を探してる。そいつを見つけないと難しいな」

「ポケットに入れといた“物”を取り出す。」

「つたく、ちゃんと仕事しろよ……………」

「?と書かれた青い宝石を眺め、ボソリと呟いた。」

第九話 主人公とヒロインのデートって大抵邪魔者入るよね（前書き）

大変長らくお待たせしました

今後の展開について考えてたら遅くなりました

司「前回の更新から約二週間ぐらいか」

ああ、思ったよりたってなかったんだ  
では物語をどうぞ

司「反省しろよ！」

## 第九話 主人公とヒロインのデートって大抵邪魔者入るよね

あれから数日。

とくに何もなくジュエルシードや魔法なんかとは絡まずに過ごせた。  
一応チルル 正確にはグラントだが に管理局や魔法について  
教えてもらった。

どうやら俺にもリンカーコアと呼ばれる魔力を作り出す機関があるらしい。

簡単な魔法や漫画の技とかを未完成ながら覚えたが多分使わないだろう。

つか使う状況になりたくない。

そもそも三日で飽きた。疲れるし。(チルルはため息を吐いてたが)

「あ、これ可愛いわと思わへん?」

「そうか?俺はこっちのほうが可愛いと思うが」

ついわけ今ははやてと街中でデートをしている。

ウィンドウショッピングしてるだけだからデートと言うよりも散歩に近いが。

まあガキ同士だしこんなもんだろ。

なのは達にもサッカーをやらなしかと誘われたがデートの約束があったので丁重にお断りした。

なんでもなのはのお父さんが地元のサッカーチームの監督をしてるとかなんとか。

サッカーなんて興味ないけど。

はやてが乗っている車椅子を押して歩く。

最初の頃は俺が押して歩く度に「ありがと」「やら」「ごめんな」と

か言ってきたが最近は全然言わない。  
その代わりよく話すようになった。  
今だって

「昨日のペット大特集見た？」

「あのペットのホームビデオかき集めたやつだろ？見た見た。可愛  
いかったなあれは」

「じゃあだるまさんが転んだをする猫は？あれわたし好きや」

という会話をしている。

確かに謝られるよりこっちの方がいい。

そして夕方。

楽しい時間はすぐに終わってしまう。

正確には時間は進む速さは変わらず、自分の勘違いだが、とか偉そ  
うに言ってみたり。

これ以後ははやてを送っていくだけ……

「……………ッ！」

「？ どないした？」

今一瞬すごく嫌な感覚に陥<sup>おちい</sup>った。  
なにかが起こる予感がする……。

（来るのヨ！）

チルルの声が脳内に響いた瞬間、巨大な樹の根のような物がコンク  
リートを割って出てきた。

「きゃああああ!!」

はやての悲鳴と共に俺は即座に車椅子を方向転換し、その場から離れた。

ドン!と何かを叩きつけるような音が後ろから聞こえた。

振り返ると巨大な木の根が俺達が居たところを叩きつけられていた。

「……ッ!ざけんなよ!」

そのまま突っ走って逃げようとする。

が、新たな木の根が俺達の前に現れた。

「クソ……!」

仕方なく車椅子からはやてを抱き上げる。

「え……ちょっと司守くん!」

完璧お姫様抱っこ状態だが気にしない。  
てかする余裕がない。

これって確実にジュエルシードだよな……。  
なんでこんな街中で発動すんだよ!

正当ギレをしつつ走り出す。

しかし長くは続かないだろう。

いくらはやてが軽くても子供の体力なんてたかがしれてる。

まだまだ未発達の身体じゃ同い年の子供を抱いて長く走れるわけがない。

まあ走れるだけすごいが。

とりあえず安全な所にはやてを送らないとな。  
ジュエルシード探索はそれからだ。

しばらく走り続けた後、近くビルに入った。  
避難した後なのか中には人がいなかった。  
本当ははやても避難させたかったが流石に体力が保たない。  
はやてをソファアに座らせる。

「大丈夫か、はやて」

「わたしは大丈夫。司守くんの方が大変やったる？」

「平気平気。割と鍛えてるから」

学校の授業で。

え？鍛えてない？

細かいことは気にすんな。

「……さて」

ジュエルシードをなんとかしないとな。

ここも何時まで安全か分からんし。

「ちょっと周り見てくるわ。大人もいるかもしれんし」

「え……大丈夫なん？外は危ない？」

「無問題」

なぜか中国語で言ってるビルは出口に向かおうとする。



ピシッと嫌な音がした。  
音の発生源らしき方向……真上を見る。  
よく見えないがひびの様なものがあるような……。  
心なしか埃が落ちてきてる気も……。

嫌な予想が出来上がった途端、まるで正解と言つかのように天井が音を立てて崩れ落ちた。

“うきながらだくめき”

チルルが身体の中で謳う。  
ダメだ間に合わない！  
もつとモーションが短くて強力な盾は  
あつた！

空中に“円”の文字を書く。

「竜之炎伍式！円まじか！！」

瓦礫が地面に落ちた。  
本当ならその瓦礫が俺達を潰して死んでいた。  
が、間一髪なんとか間に合った。

「あ……あれ？」

自分の身を守るように身を丸めていたはやては無事だったことに気づいてようやく身体を起こした。  
そして不思議に思った。

なぜ無事なのか、この赤い半透明な壁はなんなのか。

この赤い半透明の結界の名は円。

“点”によって生み出された“面”の結界。

複数の炎の玉で面を繋げた強固な結界だ。

最も、弱点は点を壊されたら面も少なくなることだが。

つまり、点が四つなら四角形の結界が、三つなら三角形の結界が、二つなら当然出来ないということだ。

もちろんそんな弱点があっても強力なことに変わりはないが

円を解除して自分だけ出る。

その後再び円を発動させてはやてを囲む。

「え……ちょ、なんやこれ！」

「悪いはやて。とりあえずこの中にいれば安全だから」

「これ司守くんの仕業なん！？はよ出して！」

「外は危険だからここにいろ。すぐ戻ってくる」

「まさか一人で行く気！？確かにわたしは歩けないけど……」ここで助けを待てばいいんじゃないか？

「そうしたいんだけどね……」

このままほっとけば被害は増える一方だろう。

早くジュエルシードを封印しなければ……。

「いろいろ事情があんだよ」

「……………」

俺の目をはやてがジッと見る。

やだ照れちゃう……なんて思わずはやての視線を受け止める。

「わかった、行ってええで」

「ありがとう、はやて」

「ただし！早く戻ってくることにその事情をちゃんと話す約束してからや」

「ああ、早く戻ってくるし、後で事情も話すよ」

出口に向かって歩き出す。

「行ってくる」

「……いつてらっしゃい」

ビルを出た。

さあ、とつと用を済ませて戻るか！

チルルに習った飛行魔法で空を飛ぶ。

途中でバランスが崩れた。

「おっと……また練習しないとダメだな」

まだ完璧に修得する前に止めたからな。

他のもだけど。

冷静に考えるとよく円発動出来たよな。

失敗した場合を想像するとゾツとする。

“うきながらだくめき

艶なる息そに

契り籠ん！”

チルルと同契する。

同時に黒いロングコートを生み出し袖を通した。

この黒衣は以前チルルに教えてもらったバリアジャケットを作ってみたものだ。

防刃、防弾、対魔の効果をもっている。

黒衣なのは俺の趣味な。

カツコイイじゃん、黒衣。

黒猫しかり煌珠狩人しかり呪われた炎術士しかり。

そんなことよりジュエルシードだ。

早く探し出さないと危険すぎる。

多分幾つかある巨大な樹のどれかにあると思うが……どれだ。  
なんかチートで出して探した方がいいよな。

「止まるのヨ！」

チルルに言われたとおりややバランスを崩しながら空中で止まる。

「どうした」

「誰かいるのヨ。神社のときと同じ奴なのヨ」

「マズいな……一旦どこかに身を隠すか」

「前方やや左のビル……砲撃魔法を撃とうとしてるのヨ！」

砲撃って確かデカイビームとか撃つんだよな？

「なんでそんなもんを？」

「多分力ずくで封印するつもりなのヨ」

「ずいぶんパワフルな……ってあの距離でか！？」

チルルが言ったビルと巨大樹は正確な距離こそわからないが、  
そうとう距離がある。

そこからジュエルシードを撃ち抜くって……自信があるんだろうな。

「顔だけでも見とくか……」

ジュエルシードはその魔導士に任せ、俺はそいつの顔を拝もうとスコープを生み出して覗く。

魔導士のバリアジャケットは白く、ドレスの様な姿だった。

手にしているデバイスは槍の様に先端は尖り、桜色の魔力を集中させていた。

そしてその顔は……

「なのは……？」

学校の友達である高町なのはだった。

なぜなのはがここにいるのか？

なぜバリアジャケットを着ているのか？

なぜ魔導士の武器であるデバイスを持っているのか？

複数の謎が脳内で浮かび上がると同時になのはのデバイスから魔法が解き放たれた。

桜色の光線が巨大樹に直撃する。

すると巨大樹はそこから見る見るうちに消えていった。

「撤退するのヨ」

チルルが言う。

「あの子があんたの友達だとしても管理局かもしれない。捕まる訳にはいかないのヨ」

「……分かった」

なのはが魔導士であること。

はやてにいろいろ説明しなきゃいけないこと。  
両方に頭を抱えながら俺ははやての所に戻った

## 第九話 主人公とヒロインのデートって大抵邪魔者入るよね（後書き）

チート大図鑑2

【名前】

円

【原作】

烈火の炎

【能力】

点による面の結界

【その他】

主人公、烈火に宿る八竜の一匹

三つの目を持つ火竜

炎の結界王を自称してるだけあって強力な結界を張れる

ただし結界の所々にある火玉の点を破壊されると結界の面積が小さくなり最終的には結界自体が破壊される

司「なんか防御系多くね？」

碧「お前の命を守る為だ。素人が銃を持ったってビビって撃てないし、撃てたとしても反動で銃落として殺されるだけだろう？」

司「グ……確かに」

碧「だったら盾持たせた方が安全だろ。それともなんだ、また死にたいのか？」

司「そ、それはそうとなんで今回遅れたんだよ」

碧「話題変えやがった……。実ははやてにお前のことバラそうか迷って」

司「そーいや今回バレたな。つかバラそうって字だけ見ると物騒だな……」

碧「秘密にするかしらないかでA・Sが変わるからな」

司「A・Sってなんだ？」

碧「なんでもないよ。お前ただ主人公してる」

司「なんか無性に腹が立つんだが」

碧「今回はここまで」

司「次回はどうすんだ？」

碧「フフフ……次回は皆さんお待ちかねスク水っ娘の登場だ！」

司「スク水!？」

碧「更新は未定だがな」

司「オイ！」



## 第十話 修行開始 忍び寄る熊と獣耳とスク水魔法少女

あの事件の後、俺ははやてに様々なことを教えた。

魔法のこと。それを使う魔導士のこと。管理局のこと。

全てチルルの受け売りだけど。

もちろんジュエルシードの事は言わなかった。

ただ俺の事は「管理局に所属してない魔導士」と説明した。  
間違っていないからな。

「なんで入らへんの？」

という問いに俺は

「はやてに会えなくなるからな」

と答えた。

正直めっちゃ恥ずかしいセリフだよな。

はやても顔真っ赤にしてたし。

でも管理局に入る気は本当に無い。

そういうデカイ組織ってのは一枚岩じゃないから誰が何をやらすかわかったもんじゃない。

ドラマでも見るように警察の上層部が犯罪を犯してたりするからな。  
基本的に信用できん。

だいたいどこにあるのかも知らんし。

とりあえずそれはそれでおいといて。

「オプティックバレル！」

手にした白い銃のトリガーを引くと銃口から約10メートル先の空間で爆発が起きた。

そこには何もなし、そもそも銃口からは何も出ていない。

白い二丁拳銃

魔銃ベルヴェルクは術式と呼ばれる魔法と科

学を混ぜ合わせたものを遠隔発動させることが出来る。

今のがまさにそれだ。

普通の銃は弾が出て直線に飛んでいく。

しかしベルヴェルクは術式を遠隔で撃つので任意の場所に任意の威力で撃つことができる。

最初は術式自体を使うのが大変だったが慣ればなかなか使い勝手のいい武器だ。

ん？何してるかって？

修行だよ修行。

因みに一目につかないように山で修行している。

基本毎朝、はやてに勉強教えない日は平日は暗くなるまで、休日はほぼ一日中している。

前回のジュエルシードの事件のときに思ったんだがもしかしたら俺の家族にも被害が及ぶかもしれない。

そのとき俺が強ければはやてのときみたいに助けられるかもしれない。

なら強くなるしかない。

だから修行を始めた。

前は漫画の技を使えるかもしれないなんて理由で、しかも三日で飽きたが今回は違う。

絶対強くなって守ってやる！！

「だいぶ良くなってきたのヨ。学校もあるし今朝はここまでのヨ」

師匠であるチルルからそう言われたのでベルヴェルクとチルルを消してジャージから制服に着替える。

そして鞆を持ったところで、固まった。

.....

.....

—

.....

└

.....

.....

「クマー」

そう、今の鳴き声で分かるとおり熊が木々の奥から現れたのだ。

え？熊はそんな鳴き声じゃない？

こまけえことはいいんだよ！

そんなことより大事なのはこの熊だ。

特徴的な立ち方。一メートルほどの背丈。そして何よりも頭のアンテナ。

そう。

今や鹿のせいで絶滅したとされていた熊……

アナログマ！！

「い、生きていたのか……！」

キュピーン！

「クマーー!!」

「のわ!?!」

目を光らせたかと思ったらいきなり殴りかかってきた！あれか、絶滅したと思われてたのが気に入らなかったか。しかたないだろ、今は地デジの時代なんだから！

とにかくさっきまで出してたベルヴェルクを出して殴った。もちろん殴った後術式を撃って蜂の巣にした。

とっさとはいえエグいことしたな……。ほら、もう消え……。消えてる!?!

アナログマのほとんどが消えたところに身体からジュエルシードが出てきた。

どうりで、と思いながら封煌符で封印。

「アナログマ……。君のことは忘れない……」

「その貴方、そのジュエルシードを渡してください」

「言うこと聞いたほうが、無駄なケガしないで済むよ」

アナログマの追悼をしているとなにやら物騒な台詞が聞こえたのでゆっくり振り向く。

「

」

そして言葉を失った。

なぜなら……。なぜなら……

金髪ツインテスク水幼女とナイスなボディの獣耳お姉さんが空から降ってきたからだッッ！！

「ありがとうございます！！」

礼を言っ たさ、良いもん見れたからな！  
もちろん腰を90度曲げて。

スク水幼女は腰にヒラヒラが付いててパンチラっぽく見えるし獣耳お姉さんはヘソ見えてるし二人ともマントでマニアックだし！！

「……………え？」

「なに言っ てんだい？」

突然お礼を言われてポカーンとしている二人。

そりゃ何もしてないのにいきなりお礼言われたら驚くよな。こっちとしては十分してもらったが。

「ねえフェイト、やっぱりこいつ管理局じゃないよね」

「うん、さっきの戦いで戦い慣れしてる様には見えなかった。それにジュエルシードって言葉に反応しなかったから多分違うと思う」

ん？ 管理局を知ってるってことはこの娘達も魔導士なのか。よくよく考えれば空中に浮いてるって時点で確定してるか。つか見てたのかよ。

それはそうと、

「えっと、ジュエルシード欲しいの？」

「ッ！あんたやっぱり……」

獣耳お姉さんが睨んで襲いかかろうとするのをスク水幼女が止める。正直めっちゃ怖いです……。

「待ってアルフ。……貴方は管理局じゃないの？」

ちよつと高圧的になったな。

獣耳お姉さんほどではないけど怖いぞ。

「いや、違うけど」

「じゃあ……なぜジュエルシードを知ってるの？」

「なぜって……教えてもらったから」

「誰から？」

「それは教えられない」

「さっき言ったことは撤回するよ。こいつ怪しいよ、フェイト」  
「……………」

なんでさ。

確かに教えないってのは怪しいけど。

だからと言ってグラントのことを教えるわけにはいかないし。困ったものです。

「ジュエルシードは最近発見されたロストロギア……つまりまだあ

まり知られていない代物。それを知ってるのは怪しい。けど、母さんの為にもジュエルシードを「そおい！」ッ!？」

アナログマから手に入れたジュエルシードをフェイトと呼ばれたス  
ク水幼女に投げる。

「その巻いてある布を破くと封印解けるから気をつけろよ」

「え？」

「もう一個！」

カバンに入れといた化け犬から手に入れたジュエルシードも渡す。  
これでジュエルシードは全て渡した。

「なんで……」

「欲しかったんだろ？」

「それはそうだけど……」

「なんか企んでんじゃないだろうね!？」

普通はそう思うよな。  
けど違う。全然違う。

「フェイトだったっけ」

「……？」

「母さんの為ってさっき言ったろ。俺もさ、母さんが大好きだ。母さんだけじゃなくて兄弟たちも。だからフェイトが自分の母さんが大好きな気持ちわかるからさ、出来るだけ協力しようと思う。」

とりあえずジュエルシードを手に入れたらそっちに渡せばいいよな  
?」

「本当に企んでんだいあんたは……!」

「アルフ、行こう」

「け、けどフェイト……」

「協力者は居た方がいい」

「……わかったよ。ったく、そういうところは頑固なんだから」  
「ごめん」

微笑んで徐々に浮上していく。

そして気づいたようにこっちを見て

「私はフェイト・テストロッサ。この子は使い魔のアルフ」

「言っとくけど、私達の命令はちゃんと聞くんだよ！」

「俺は橘司守だ。よろしくな、フェイト、アルフ」

自己紹介を済ませると、フェイトとアルフは遙か彼方へと飛んでいった。

さて、ガハンに入れといた時計を確認する。

うん、遅刻だ。

…

…

…

橘 司守

フェイト・テストロッサ

…

…

…



「ねえフェイト、本当にいいのかい？」

後ろで飛んでいたアルフが聞いてくる。

「大丈夫だよ。アルフは心配し過ぎ」

「そりゃ心配もするさ。相手は得体の知れない子供だよ？」

「アルフだってまだ子供のくせに」

そう、アルフは人間状態でこそ身体は大きいが実はまだ二歳なのだ。

「あ、あたしは狼だから早く成長するんだよ！フェイトも知ってるだろ」

アルフが止まって頬を膨らませる。

そんな仕草も愛おしく思う。

主人と使い魔だからだろうか。

「ねえアルフ」

「なんだい？」

自分も空中で止まりアルフを見つめる。

「私は、母さんが好き」

「……ああ、知ってるよ」

僅かに眉にシワを作るアルフ。

アルフは母さんが嫌いだ。

当然だ。アルフは厳しい母さんしか知らない。

けど昔の、優しかった頃の母さんに戻ればアルフもきっと母さんが好きになるはず。

「あの子も母さんが、家族が好きだって言った」

「ああ、言ってたね」

「私もあの子も……シズも、家族が好き。ジュエルシードを渡されるとき、確かにその気持ちが伝わった。だから彼は裏切らない」

「けど……」

「大丈夫だよ」

まだ不安がるアルフに確信をもって言う。

「いざとなったらアルフが……“家族”が助けてくれるから」

アルフは驚いた後、とびっきりの笑顔で

「当然だろ！どんな敵が来たってあたしが“家族”を守るんだから  
！！」

「うん、頼りにしてる」

私達は並んで基地に帰った。

第十話 修行開始 忍び寄る熊と獣耳とスク水魔法少女（後書き）

チート大図鑑3

【名前】

魔銃 ベルヴェルク

【原作】

BLAZBLUE

【能力】

術式の遠隔発動

【その他】

アークエネミーと呼ばれる意思ある魔導書

魔導書といっても形状は本とは限らず様々な形状をしている

ベルヴェルクの形状は二丁拳銃だが銃であれば変形が可能  
術式を使えば殴ってよし、撃ってよしの万能武器である

司「やっと攻撃的な武器がでたな」

碧「ヴァーミリ音頭でもするか？」

司「するか！」

碧「無い人は普通にしてるじゃないか」

司「てか分かんない向けのコーナーじゃないのか？ヴァーミリ音頭  
とか分からだろ……」

司「で、なんで遅れた？」

碧「なんの話かな？」

司「なんの話かな？じゃねえ！月の始めに投稿したのに次が月末に投稿ってどういうことだ！」

碧「いや、実はアナログマのネタやりたくてアナログ終了まで待つてたっていう」

司「……で、次は？」

碧「そうイライラしない。えーと、次は温泉かな」

司「橘院でか？」

碧「違うんだなあ。分かる人は分かるよね。後、作者は和服萌えだ」

司「はいはいワロスワロス」

碧「（・・）」

## 第十一話 海鳴温泉殺人未遂事件（前書き）

某日深夜

家族と温泉旅行に来ていた少女が共に旅行に来ていた同じ学校の友人に不思議な杖で暴行される事件が発生

加害者の少女は

「早くトイレに行きたかったのに行かせてくれなかったの」

と供述しており、事件当日について被害者の少年は

「あ…ありのまま起こった事を話すぜ！

『俺はトイレの前でN（加害者）と話してたら魔法の杖的な棒で殴ってきた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…ヤンデレだとか気が狂っただとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

とのことだ

より詳しい情報が届き次第お伝えします

え？

……はい……はい……

どうやら事件当日の映像が届いたようです  
ご覧ください

## 第十一話 海鳴温泉殺人未遂事件

あれから数日。

え？訓練の描写？

俺は見えないところで努力する派なんだよ。

「それでさあ……」

「えゝ、それ本当？」

俺はなのは達に誘われ海鳴温泉に向かっている。

温泉とか久しぶりだわ。

しかもお泊まり。

いいね。

ちなみに二台の車で来ており、一台はなのは兄、すずか姉、月村家のメイド二人。

すずかが金持ちということを知った。

あとなのは兄とすずか姉は親公認の仲らしいじゃないか。  
爆発しろ。

もう一台には俺と兄以外の高町家とすずかと金髪ツンデレ。

「誰が金髪ツンデレよ！」

口に出してないのに後ろの金髪ツンデレもといアリサに怒られた。  
なぜに。

「思いっきり口に出してたから」

マジか。

教えてくれてありがとうなのは姉。  
名前は忘れた。

……口に出してないよな？

「美由希ね」

s o r r y.

「特訓と聞こえたが、何かスポーツでもしてるのかい？」

と運転手である土郎さんから声が。

某自己犠牲主人公と名前同じだから名前を覚えられた。

そうでもないと覚えられん。名前覚えるの苦手だし。

てか最初から聞こえてるっていう。

考え事してるときは口に出してないか確かめてからにしよう。

「いえ、ただ身体が鈍ってるから自主トレしてるだけです」

「ほづ……なら家の道場で剣を学ばないか」

その発想は無かった。

そして家に道場とか金持ち乙。

どんだけ翠屋繁盛してんだよ。

「いいの？」

「本人がいいと言えはだが……小太刀二刀御神流と言ったが知ってるかい？」

「小太刀二刀流は御庭番式しか知りません」

知らない流派だな、と呟く土郎さん。

だろうね！。

漫画の流派だし。

「まあ気が向いたら家に来ればいい。場所は分かるかい？」

「生憎とお宅に行った覚えがありません」

「ならなのは、今度連れて来てくれないか」

「はい！」

何故だ。

なのははともかく土郎さんにフラグを立てた覚えはない。

幼なじみを攻略してたらその弟が押し掛けてきた時ぐらい覚えが無い。

「なのはの父ちゃん超怖い」

「そう？優しいお父さんだよ？」

だつてさあ……。

なのはのお兄さん……恭也さんだっけ？と湯に浸かっていると土郎さんも入ってきていきなり御神流の歴史を語ってきたんだぜ？

恭也さんが止めてくれなかったら今頃茹で上がった。

「大袈裟ね。そのままサウナに行けばいい感じに蒸せたんじゃない？」

アリサてめえ。



「んー……でもなんでお父さんそんなに司守くんを誘うんだろう？  
今までお兄ちゃんとお姉ちゃんにしか教えなかったのに」  
「なんか才能があるんだと。めっちゃ複雑だけど」

鍛えられるのは嬉しいが士郎さんルートとかマジ勘弁。

「ところでさ」

「ん？」

「ここってペットOKなの？」

いつの間にかなのは肩に乗っていたフェレット。  
今までなぜ気づかなかった俺。

「飼い主がちゃんと面倒見れるなら構わないって」

「へえー……名前は？」

「ユーノくんっていうの」

「キユキユ！」

「お前今日からマミさんな」

「キユ！？」

「なんで！？」

「なんか声が似てた」

「なんであんたの知り合いフェレットに声似てんのよ」

いや、知り合いじゃないけど。

「なのはは梨花ちゃんて」

「わたしも！？」

「アリサはルイズだな」

「誰よいったい！？」

「すずかは　ああ、すずかいたっけ。すずかは大先生な」

「わたしは喜んでいいのか悲しんでいいのかわからない……」

「喜べ、頭良すぎて落ちこぼれた魔装少女が尊敬してる人のあだ名だ」

「なんか……アンタを疑ってたアタシが馬鹿みたいだよ……」

なんか聞き覚えのある声だなー、と思ったら目の前に浴衣姿のアルフがいた。

耳と尻尾が無い……だと……？

「君かね、うちの子をあれしてくれちゃってるのは」

「え？え？」

「あんま賢そうにも強そうでもないし……ただのガキンチョに見えるけどね」

何故かなのはがボロクソ言われてる。

なのははアルフに何をした。

そしてなのはを守る様にアルフとなのはの間に入って睨むアリサ。カッコいい。

「なのは、知り合い？」

「う、ううん」

「嘘だ、絶対嘘だ。初対面でボロクソ言う人なんていたわ、目の前に」

「アタシかい？」

他に誰がいる。

「出会っていきなり脅された上に疑われるとか涙目過ぎる」

「はいはい、悪かったって」

誠意が感じられねえ。

「シズくんの知り合い？」

「そんな感じ」

「なんであんたの知り合いがなのはにいちやもんつけてくるのよ」

俺が聞きたい。

「アッハッハッハッハ」

「いい病院紹介するぞ」

「失礼だね！」

だつていきなり笑い出すから。

「どうやら人違いだったみたいだねえ。ごめんごめん」

そう言つて去つていくアルフ。

なのはが険しい顔してるのはきつと気のせい。

（聞こえるかい？）

（脳内に声が！？これが噂に聞く念話か。しかし相手に伝える方法を知らない俺は返事が出来ない。スマンアルフ）

（聞こえてるから。夜にフェイトがジュエルシードを封印するからその茶髪の子を足止めしといて）

（なのはをか。何故に）

（何故つて、その子も魔導士だからに決まってるだろ？それじゃ頼んだよ）

アルフは一度だけこっちを振り向いてどっか行つた。

……やっぱりなのはって魔導士だったのか。  
今まで気にしてなかったけど事実だって分かると気になるよな。  
足止めついでにそれとなく聞いてみるか。

「鬼は言いました。

『俺の仲間になれば世界の半分をくれてやろう』

すかさず桃太郎は

『ならお前を倒して世界の全てを貰おう』

と鬼を真つ二つに斬りました。そして桃太郎は世界を征服しました。  
めでたしめでたし」

それはめでたしでいいのか？

子供達が寝るときすずかのメイドさんが桃太郎を読んでくれたんだ  
が、俺の知ってる桃太郎はそんな話じゃなかった気がする。

しかもお供が猿、犬、雉じゃなくてゴリラ、狼、鷲とか勝てるわけ  
がない。

つかゴリラ日本にいねえ。

「みんな寝たかな」

すいません起きてます。

なんて言えるわけなく寝たふり。  
みんなも……どうして寝られるんだよ。  
突っ込みどころ多すぎて寝られねえよ。  
そもそもこんな早くに眠れるか。  
まだ10時だぞ。  
フエイトまだかなあー……。

約三時間ぐらいたった頃だろうか。

大人達の声はなくなり、いい感じに眠くなったときだった。  
ジュエルシードが発動したであろう、あの嫌な感覚が眠気を吹き飛ばした。

同時になのはも飛び起き、部屋を出て行こうとする。  
何故ユーノを連れていく。

「……どこ行くんだ、なのは？」

ただいまちょうど今起きましたよ？と言わんばかりの演技を披露中。  
たぶん子供店長に勝てる。

「え、えつと……トイレ……」

「なら俺も行こう」

「ふえ！？べ、別に一人でも平気だよ？」

「ユーノを連れて行こうとしてる人が何を言う。後、俺もトイレ行きたいだけだ」

渋るなのはだったが時間の無駄かと思ったのか了承してくれた。  
やったね。

早く封印終わらないかな。

…

……

………

橘 司守

高町 なのは

………

……

…

暗い廊下を歩くわたしとシズくん。

どうしてこうなっちゃったんだろっ……早くジュエルシードを封印しなきゃいけないのに……。

（仕方ないよ、なのは。彼を送ったらすぐにジュエルシードの所に行こう）

（分かってるよ……）

少し歩いてやっとトイレに着いたの！

けどなかなかシズくんがトイレに入ってくれないの……。

「なあ、なのは」

今度は何なのー！

「なんかさ、最近悩み事とかないか？」

「悩み事……？」

「なんかそう見えたからさ」

そう見えるのかなわたし？

たしかに悩んでることはいっぱいあるけど……。

「うっん、何もないよ」

さすがに学校の友達に魔法の事は言えないもん。

「そうか……」

シズくんは納得出来なかったのか、まだこっちを見る。

うっ……早くしなきゃいけないのに……。

（このままじゃ埒があかない。なのは、彼を気絶させよう）

（気絶って……危なくない？）

（ちゃんと加減すれば大丈夫さ。それより早くしないと手遅れになる）

（……分かったの）

そっと、レイジングハートを握って……

…

……

……

高町　なのは

橘　司守

……

……

…

どうしよう……話しのネタが尽きた。

テレビの話でもいいなかって思ったけどトイレの前にきて話すことじゃないし。

唯一用意したなのは魔導士か否かも直接聞けないし、間接的に聞いたら何もないって言われたし。  
どーしょ。

「シズくん、ごめんっ!!」

はい？

あれなのはさんいつの間に魔法の杖的な棒を？

そしてなぜそれは天井を指してるの？

なんで俺に向かってくるのおおお!？

「そおおい!!」



全力回避

その勢いで転んでしまった。

絶体絶命

「待て、待ってくれ。話し合えば分かるはずだ。金か？金が欲しいのか？」

「違っよ！」

「ならただ単に俺の命を……？な、何故だ！」

「それも違っよ！」

「じゃあなんだ」

「そ、それは……」

何故口ごもる。

まさか本当に……？

「えっと……早くトイレに行きたくて……つい？」

「その方法が殴るとか素晴らしすぎる案に全俺が泣いた。後何故疑問符」

（司守、封印出来たよ。足止めありがとう）

（ナイスタイミングフェイト。そろそろ限界だったわ。俺の命が）

後少し遅かったら俺はあの魔法の杖の生贄になってた。

てか見せちゃっていいんですかなのはさん。

魔導士の証拠じゃないっすか。

「とにかくすまなかった。二度としないからなのはも二度とこんなことしないでくれ」

「こ、ごめんなさい……」

急いでトイレに行く俺。  
一瞬マジで出そうになった。  
何がと言わない。  
パンツが若干濡れてるのは気のせい。

…

…

…

橘 司守

高町 なのは

…

…

…

温泉出発のとき、わたしはすっごく落ち込んでました。

「結局間に合わなかったの……あの金髪の子が持っていたのかな？」

ちゃんとお話したかったの。

「……ねえ、なのは」

「どうしたの？ ユーノくん」

「昨晚……彼を気絶するときなんでレイジングハートで直接殴ろう

としたの？」

「え？だってユーノくんが言ったから……」

「僕は“魔法”でって意味で言ったんだけど」

あっ……

## 第十二話 高町士郎のパーフェクト御神流道場（前書き）

前書きと後書きは必ずなにか書こうと思って投稿したらネタがなかったでござる

ちなみに後書きは『チート大図鑑』がないかぎり主人公と私の雑談になる予定

べ、べつに質問とかあったら答えてあげなくてもないんだからね！

## 第十二話 高町士郎のパーフェクト御神流道場

「どうしたんだ？」

「え？」

学校が終わり、誘われた通り高町家にお邪魔するのだが……案内役のなのはがどうもテンションが低く過ぎる。

「元気ないぞ」

「にやはは……分かる？」

「逆に分らない方がおかしい」

「そっか……ごめんね」

「別に謝らなくてもいいけどさ……なんかあつたのか？」

そう言うとなのはは暗い顔をしながら

「アリサちゃんとケンカしちゃって……」

「なんで？」

「色々考え事してて……それでアリサちゃんに自分達といるのがつまらないのかって」

考え事って十中八九魔法の事だよな……。

俺のことも教えちまうか？

でもそれだとグラントのことも教えないといけないし……。

「まあ……さ、ケンカしたんなら仲直りすればいいじゃねえか」

「え？」

「ケンカなんか何時かはするもんだ。何回もな。ならいちいち悩んでないで何回でも仲直りすればいい。そうした方がよっぽど楽しく

過ごせるぜ」

「……仲直り、出来るかな」

「当然だろ。お前ら親友なんだろう？」

「……ありがとうシズくん、わたしアリサちゃんに謝るよ！」

元のテンションに戻ったのはと会話しながら高町家に向かう。

……あ、士郎さんのこと忘れてた。

「ただいまー。お父さん、シズくんつれて来たよ」

「お帰り、なのは。久しぶりだね、司守くん」

「お久しぶりです、帰ってもいいですか？」

「はっはっは、面白い冗談だね」

冗談じゃないっす。

士郎さんめっちゃいい笑顔じゃん。

嫌な予感しかしねえよ。

「じゃあ早速道場に行こうか」

早いよ。

「さすがに早すぎるんじゃないかな、父さん。せっかく来てくれたんだから」

「む……そうか」

流石恭也さん、俺が思っている事を代弁してくれる！  
そこに痺れる懂れるう！

「……と言いたところだけど、俺も父さんが認める程の才能を見たいんだよな」

「おお！なら早速行くか！」

俺を裏切ったなああああ！！

\*\*\*しばらく音声のみでお楽しみ下さい\*\*\*

「どうだい？私と恭也の試合は」

「人間の限界ってどこにあるのかと思いました」

「このぐらいすぐ出来るようになるさ。さあ基礎からやろうか」

「あ、待って下さい。正座してたら足が、んま……つあ、ちょぎ…

…」

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ……やります！僕も御神流を習います！」

「いい答えだ！行くぞ！」

「え、待つて基礎はぐへえ！」

「士郎さん……俺に足りないものが分かりました」

「なんだい？」

「俺に足りないものは！それは！情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ、そしてなによりもお！速さが足りない！」

「御神流は速さが命だからな。ならこれは避けられるか！？」

「だから速さが足りないってぐへえ！」

「ジドルザァン！」

「ん？」

「ギゾバドルジタンディスカー！オリバギゾガナライタイディス！」

「真面目にやれ！」

「オンドウルラギッタンディスぐへえ！」

\*\*\*以上音声のみでお送りしました\*\*\*

「……シズくん、大丈夫？」



「オデノカラダハードボドボダー」

士郎さんの嘘つき。

基礎からだって言ったじゃない。

実戦レベルの特訓じゃない、これ。

「実戦に勝る訓練はない」

実戦をするために基礎があるのを忘れてはいけない。

お陰で何度床とキスしたことが。

ファーストキスはレモン味がよかった。

「けど基礎無しであそこまで身体が動くななんて凄くないか」

「恭也さん、誉めてくれるのは嬉しいけど無理にでも立たせようとする士郎さんを止めてください」

士郎さん、脇を持って立たせないで。

手を放した瞬間顔面強打するかラッ！

痛い……………。

「しょうがない、今日はここまでにしよう。少し休んでから帰りなさい」

やっと解放される……………。

初日からハード過ぎた……………。

「母さん、ビール」

「はいよ」

風呂上がりにそう言って渡された子供ビール。

「まさか本当にビールを渡されるとは思わなかった」

「今日高町さんの家で稽古してもらったんでしょ。だから頑張った  
ご褒美」

なんとも微妙なご褒美。

嬉しいけど。

飲み終わったビンを母さんに渡して部屋に戻る。

余談だが橘院は二階建てで10個の子供部屋があり2、3人で一部  
屋使っている。

ちなみに俺はバカ兄と同部屋だ。

「司守」

後ろからカサ姉に呼ばれた。

「どうしたの？」

「今日司守が頑張ったって聞いたから誉めてあげようと思って。入  
っていい？」

「ん、いいけど」

カサ姉は甘えさせたがりだからな。  
俺もそれに甘えるが。

とりあえず部屋に入り、二段ベッドの下の方　　上はバカ兄で下は俺が使ってる　　に腰掛ける。

するとカサ姉は俺の隣に座り太ももを二回叩く。

膝枕の合図だと分かると遠慮なく頭をカサ姉の太ももの上に乗せる。

関係ないけど膝枕って膝を枕にしてないよね。

どう見ても太もも枕だよな。

そんなことよりカサ姉の太もも柔らかいナリー。

パジャマだからより太ももの感触を味わえる。

静かに頭を撫でる手も気持ちいい。

まったく、いい姉を持ったものだ。

そして、その気持ちよさに身を委ね眠りにつこうとしたときだった。

“また”あの感覚だ。

しかも近い。

多分いつぞやみたいに街中で発動してるんだろう。

急いで起き上がろうとして　カサ姉が俺の肩を抑え、妨げた。

再びカサ姉の太ももに頭に乗せる。

カサ姉の顔を見ると

「もう、いいんだよ」

まるで全てを悟っているように呟いた。

「司守がこんなに頑張らなくてもいいの。司守はね、もっと楽しんでいいんだよ。もっと好きな事していいんだよ。無理に……辛い道を進まなくてもいいんだよ」

なんでカサ姉がこんな事を言い出すのかは分からない。  
もしかしたら秘密に特訓してたのがばれたのかもしれない。  
魔法に関わってるのがばれたのかもしれない。

何にせよ、カサ姉が俺を心配してくれてるのは分かる。

でも……俺もカサ姉やバカ兄、母さん……この橘院が好きだ。家族  
が大好きだ。  
だから

「俺、行くよ」

立ち上がる。

「なんで？辛いだけだよ？痛いだけだよ？」  
「そうでもないさ。俺は好きな事してるんだよ、カサ姉。それが  
辛いわけがない」

部屋の扉を開ける。

「行つてきます」

「……………あまり、遅くならないでね」

返事を聞いた後、玄関まで走った。

…

……

……………

橘 司守

橘 量音

……

……

…

「行かせて良かったのか」

司守が出て行った直後、まるで狙ったように博士が部屋に入ってきた。

「お前が一番反対してたじゃねえか、あいつが“こっち側”に来るの」

「うん……今でも反対だよ」

「それでも認めたんだな」

「うん。しょうがないよ司守が決めたことだもん。尊重してあげたいよ」

私は“作り笑顔”をした。

私はこういう辛いとき、悲しいときはこの表情しか出来なかったから。

こういう生き方をしてたから、司守には平凡で何処にでもある幸せを掴んで欲しかった。

「そーかい。ハァー、せつかく二つ目と集めてる奴見つけかれたのに……海にでも捨てとくか」

「お願い。多分、また司守が見つけるから」

「だといいけどな」

そのまま博士は出て行った。

私は司守が選んだ道に幸せがあるなら、それを尊重したい。  
今はまだ分らない。

この道が司守にとって幸か不幸なのか。  
けど、幸せかどうかを決めるのはあの子自身だから。  
今は……応援してあげたい。

…

……

……

橘 量音

橘 司守

……

……

…

「大は小を兼ねるのか、速さは質量に勝てないのか、いやいやそんなことはない速さを一点に集中させて突破すればどんな分厚い塊であろうと砕け散るう！  
ハッハッハッハッ、ハッー！ドラマチック！エッセティーク！ファンタスティックランディング！」

頭の中で「テンションがおかしいのヨ」と聞こえたが気のせい。

現在最速の兄貴の最速の状態で結界に侵入。  
ハッハッハッハッの辺りで。

すると数秒とせずにフェイトを発見。

なにやら祈るような姿勢で手から光を発している。

いや、正確には光るなにかを握っている。

フェイトの辛そうな表情、僅かに流血している手。

恐らくジュエルシードを素手で封印するのだろっ。

察するに、状況もフェイトも危険だろっ。

「なら！」

そのままフェイトの元へ突っ走る。

「フェイト！」

アルフの声でフェイトは俺の存在に気づく。

だが既に俺はフェイトの前で脚を上げていた。

脚のスリットが開く。

「衝撃のファーストブリットオ！」

最速の蹴りをフェイトの横に振り落として地面に当たり、コンクリートが砕け散る。

その余波でフェイトが吹き飛ばされた。

「きゃああああ！」

「フェイト……！」

吹っ飛んだフェイトをアルフがキャッチ。

その間にフェイトが手放したジュエルシードに封煌布を巻きつける。

デス・リベーター  
「煌縛鎮！！」

しばらく光り続けるも時間が経つにつれ徐々に収まり、地面に落ちた。

回収すると目の前にフェレットが。  
フェレット？

「それをこっちに渡してほしい」

「喋るフェレットとはまた珍しいな。んー、文化的だ。だがな、これを渡す相手は決まっているんだ」

ジュエルシードをフェイトに投げ渡す。

「なっ……！」

「アルト！フェルトを連れて行け！このフェレットは俺が足止めする」

「フェイトです！」

「アルフだよ！ってその声もしかして……」

「早く！」

「ッ！分かったよ！」

アルト……じゃないアルフがフェイトを連れてどこかに飛んでいった。

「君は何をしてるのか分かってるのか！」

フェレットが睨みながら怒鳴った。



どうしようぜんぜん怖くない。

「分かっているさ」

「なら何故！？ジュエルシードは危ないものなんだ。ちゃんと封印して然るべき場所で保管しないと！」

「その然るべき場所つてのが管理局つてわけか」

「そこまで分かっているなら……」

「生憎とそっちの事情は知らないし管理局のシステムはサッパリだ。だが例え知ってたとしても、俺は彼女に手を貸すだろう」

「彼女は次元犯罪に等しいことをしているんだ！」

「勘違いしてるようだから言うておくが、俺は彼女の知り合いで協力者だが特別親しい訳でも同情してる訳でもない。ただ単に、俺の信条に肩入れしてるだけだ」

大分時間も経っただろう。

足止めは十分か。

来た方向へと歩みを進める。

「待つて……ください……」

「なのは！？まだ動いちゃダメだ！」

なのはが杖をついて歩いてきた。

なのは居たのか。

ん？てことはこのフレットはユーノか？

「大丈夫だよユーノくん……。それよりも……あなたは……どうして……  
…フェイトちゃんに協力してるんですか？」

「言っただろう、俺は俺の信条に肩入れしてるだけだ」

「ジュエルシードは元々ユーノくんのなんです……返してくれませんか？」

やっぱりユーノか。

つかジュエルシードってユーノの物なのか。  
なんて物騒なもん持ってたんだよ。

「それは彼女に言ってくれ、俺はジュエルシードを必要としないからな」

そう言っただけでクラウチングスタートの姿勢を取る。

「待つて……！」

「じゃあな、このは」

「なのはで……きゃあ！」

なのはが言い返す前にスタート。  
聞いてたらしきりがない。

最終形態だったからばれてないと思うが、なのはとはしばらく顔を  
会わせないようにしよう。

アルフにはばれていたっぽいし。

あ……御神流を習うときに会うか……。

それ以外は気をつけよう……。

## 第十二話 高町士郎のパーフェクト御神流道場（後書き）

チート大図鑑もつ数を数えるの面倒くさい

### 【名前】

ラディカル・グッドスピード

### 【原作】

スクライド

### 【能力】

アルター能力

乗り物と自身の高速化

### 【その他】

速さを愛する漢のアルター能力

アルター能力の正式名称は「精神感応性物質変換能力」

自分の精神力により物質を原子レベルで分解し、「アルター粒子」

に変換した後、特殊能力形態に再構成する特殊能力

ラディカル・グッドスピードは二つの特殊能力形態がある

一つはあらゆる乗り物を高速化

しかし相当無理をするのでアルター化を解くと爆発する

もう一つは自身を高速化

最終形態と脚部限定がある

最終形態は紫の鎧を全身に纏う

その速さは軽く音速を超える

脚部限定は最終形態の脚だけ

それだけでも十分強い

碧「兄貴かつこいいよ兄貴い！」

司「それは同感だが数を数える数を。なんだよ面倒くさいって」

碧「だっていちいち前回何回目か見るの面倒くさいだもん」

司「駄作者」

碧「重々承知」

碧「さあーで、次回の『魔法（中略）を護る』は」

司「司守です。……オイ、台本真っ白だぞ」

碧「未定です」

司「瞬殺のお……」

碧「いきなりそれかよ。多分某KY執務官道場か御神流の修行に入るかも」

司「かも？」

碧「まだ決まつとらんのよ。いったんオリジナル入れるか原作通り行くか」

司「今のところは」

碧「KY6：御神3：他1ぐらい」

司「もうKYにしとけよ」

碧「えー、だってKYだよ」

司「KYなのは我慢するから」

???「へつくしょん！」

???「大丈夫？」

???「ああ、問題無い……がなにか嫌な予感がする」

???「んー、じゃあもしもの時の為に休んでれば？」

???「そうするよ。じゃあ後は頼んだ」

???「りょーかい」

第十三話 お泊まり会々ポロリはないよ (前書き)

サービスシーンはあるけど

### 第十三話 お泊まり会々ポロリはないよ

（手に入れたジュエルシールドを母さんに渡しに行くから、明日もしジュエルシールドが発動したらよろしくね）

そんな念話をフェイトから受信した翌日。  
特に変わることのない平日を過ごすハズだった。

そう、だった。

「Oh……絶望のCarnival……」  
「やあ司守くん、今日は道場に来るのかい？」

な の は  
父、登場

「どうも士郎さん、奇遇ですね」  
「ああ、翠屋の買い出しでね」  
「それは大変ですね。応援しますよ。それじゃあ失礼します」  
「ありがとう。それで道場に来るのかい？」

さり気なく逃げようとしたら肩を掴まれた。  
握力凄いよこの人。

「買い出しはどうしたんですか？俺に構わず買い出ししてきていい

ですよ」

「買い出しなんて神速を使えばどうってことないさ」

御神流の奥義をそんなホイホイ使っていいんすか。

「すみません、今日は用事があるんでいけません」  
「そうか……」

肩から手が離れる。

あれ？随分あっさり引き下が……

「多少強引でなければ君を口説けないか」

るわけがなかった。

あと、それは某機動戦士に一目惚れした人の台詞ですよ。

「強引な人は嫌われますよ！」

後ろに向かって全速前進。

これは逃亡ではない！俺が自由を得る為の……

「では道場にいこうか」

なーんーでーさー。



「ということがあったのよさ」

「あはは、司守くんも大変やね」

あのまま高町家の道場に連行される途中で桃子さんに会わなければ  
はやての家に訪れることはなかったであろう。

「にしても士郎さんはなぜあそこまでしつこいのか」

「あんまりサボったらあかんよ？」

「サボってねえ」

そもそも自分の都合が良い時でいいって言うてたのに。  
それに俺を見る目がなんだか他の人と違うような……。  
まさかシヨタク……考えるのはよそう。

「そもそもなんでその士郎さんって人苦手なん？一応師匠なんやろ  
？」

「一緒にいたら常に御神流の話しの上にしつこさはG級だぞ」

御神流を習うのは押しに負けたということもある。

それ以外の理由もちゃんとあるけど。

「あたしも司守くんが稽古してる姿見たいなー」

「断る。なぜ俺がボロボロになる姿を見せなきゃならん」

あれは稽古ではない。一方的にやられてるだけだ。

「えー……じゃあ今夜泊まらへん？」

「脈絡が皆無な件について」

「ダメ？」

「いや、多分平気」

はやてはいつも独りきりだから、誘われたら泊まることにしてる。  
もちろん許可を取ってからだが。

「電話借りるぞ」

「うん」

受話器を取り、我が家の電話番号を押す。

『はい、橘院です』

「あ、母さん？」

『司守？』

「うん。今日はやての家に泊まっていー？」

『今日？うーん……』

「ダメ？」

『ダメじゃないけど……』

珍しい。

母さんがこんなに悩むなんて。

たいていはやての事を知っているからOKしてくれるのだが。

『……はやてちゃんが家に来るのはどう？』

「はやてが？」

『賑やかな方がいいと思うけど』

確かに……たまにはそっちの方がいいかもしれん。

「なあはやて、逆にはやてが泊まりに行くのはどうだ？」

「泊まるって、司守くんの家に？」

「そう」

「……ええの？」

「誘ってるんだから決まってるだろ」

「じゃあ……邪魔します」

「司守が彼女連れて来たぞー！！」

「なん……だと……？」

「兄貴より先に彼女作るとはどういうことだ司守う！」

「おめでとー」

「ふえ……司守……お婿に行っちゃうの？」

「うるせえ兄貴共！後力サ姉飛躍しすぎ！」

はやてを連れて帰ってきた途端これだよ。

少しは自重してほしいのだが。

「はやてちゃん……司守は頼りになる子だから、思いっきり頼っていいんだよ」

「だから行かないよ、お婿！？」

「来うへんの？」

「行かないよ!？」

はやてまで何を言ってるの!？  
本気にするよ!？

「ええよ……本気にしても」

ガツデム!

癖が治ってなかったあああ!

「うるさいよ野郎共。お客さんの前で騒ぐんじゃない」

奥から母さんが出てくる。

晩御飯を作っていたのかエプロンをしたままだ。

「いらつしゃい、はやてちゃん」

「邪魔します」

「邪魔なもんか。なんならここを第二の家とっていいんだよ」

そう言うともさんは奥に戻っていく。

「相変わらず、ええ人やね」

「当たり前だ。俺達の母さんだぞ」

「……ちよつと羨ましいわ」

「はやてだって母さんを母親だと思っていんだぞ」

「え？」

「母さんだって言ってただろ、第二の家とっていいって」

「……うん、ありがとう」

その後のた打ち回ってる兄貴達に濡れ雑巾を持ってきてもらい、車

椅子のタイヤを拭いてリビングへ。

他の兄弟達もはやてを歓迎した。

元々お客を嫌がる人間はこの橘院にいない。

むしろウェルカム。人数は多い方が楽しいからな。

晩御飯ですら

「フーハッハッハ、肉は貰ったあ！」

「最年少ブラザーズ！」

「ヒャッハー！汚物は消毒だあ！」

「な、何をする……ヤメツ……」

「エエエイメエエエエエ！」

「アッ……！」

これだからな。

いつもよりテンションが異常。

あと、二人の将来が心配である。

「はい、はやてちゃん」

「ありがとうございます」

「足りなかったら言ってね」

「いえ、十分です」

「ねえねえ、はやてちゃんってさ、司守に勉強教えて貰ってるんだよね？」

「あ、はい」

「司守って勉強教えるのほんとと上手いよね。小学生にしとくのが勿体無いよ」

女性陣も盛り上がってるようであり。

…

…

…

橘 司守

八神 はやて

…

…

…

「それじゃあはやてちゃん、お風呂入ろっか」

「あ、お願いします」

ご飯をご馳走になった後に暈音さんにお風呂に入らせてもらうことになった。

車椅子を押されて浴場に向かう。

ホンマなら司守くんがあたしの家に泊まる予定やったから司守くんに入らせてもらうハズやったのに。

そんなことを思ってたらず浴場に着いた。

ちゃんと自分で服を脱いで暈音さんに身体を洗ってもらい、湯船に浸かる。

今は暈音さんが自分の身体を洗っている。

……乳デカいなあ。

「はやてちゃんはさ、司守の事好き？」

「はい。好きです」

「素直だね」

「まあ暈音さんには負けますけど……」

うつん、と暈音さんは身体の泡を流す。

……エロいわあ。

あたしの背中側に来るように湯船に浸かり、あたしは暈音さんに寄りかかる。

足が不自由なあたしはこれが楽なのだ。

……乳デカいなあ。

「私のは母性に近いもん。はやてちゃんは女の子として好きでしょう？」

「えっと……まあ、はい」

そう答えると暈音さんはやつぱり、と言って笑った。

確かにあたしの……司守くんに対する気持ちはloveだ……と思う。

司守くんといると楽しいしもつと一緒にいたい。

そもそもあたしは家にずっと一人だし、出掛けるのは病院とスーパーと図書館だけだし、司守くん以外によく会ってる人といえば主治医の石田先生ぐらいだし生活を支えてくれる父の友人とは面識ないし……。

………多分、loveの方、かな？

「どうしたの？」

「いえ、なんでも……」

あかん、自分の気持ちが分からんってきた。

「司守はね、今頑張ってるんだ。みんなの為に」

悩んでるあたしの頭を撫でながら暈音さんは言った。

「もしかしたら頑張り過ぎて倒れるかもしれない。私達じゃ支えきれないかもしれない。」

その時は……はやてちゃんが支えてあげて」

お湯で濡れた手が濡れた髪を撫でたため、水滴が集まり首筋を通して浴槽の中に戻る。

それが数秒とかからなかった様に、あたしの答えもすぐに出た。

「今はあたしが散々支えていますから、その時がきたらずっと支えてあげますよ」

「……ありがとうございます」

また頭を撫でられる。

たまに司守くんにも撫でられるのも好きだけど、暈音さんに撫でられるのも悪くない。

まるで本当のお姉ちゃんみたいに思える。

……そういえば。

「暈音さん」

「なに？」



「やっぱり支えるにはおっぱいも大きい方がええですよね？」

「へ？えつと、おっぱいは関係無いと……」

「でも今あたしは暈音さんのおっぱいに支えられてる……」

「それは支えるの意味が違っ……きゃあ!？」

「おお……手に余る大きさ、そしてこの柔らかさ……いったい何を食べればこんな風になるんやろ」

「ちょ……はやてちゃ……ダメ……そんな強くしちゃ……」

「ええじゃないですか。減るもんやないし」

「ら、らめええええええええ!!」

…

…

…

八神 はやて

橘 司守

…

…

…

「どういうことなの……」

そろそろ出たかなーって思ってた着替え持って風呂場に行ったら入り口で二人が倒れてるんですけど。

え？なに？事件？

バーローで名探偵な小学生はいないぞ。

後カサ姉がなんかエロい。  
パジャマがちゃんと着れてなくてハアハア言ってる。  
はやても似たような感じだけどそんなエロくない。  
不思議。

「これが体形の差か……」

「やっぱりおっぱいか！おっぱいがええんか！！」

「うわっ！びっくりした！」

「ハア…ハア…んっ……司守……？いつの間に……」

カサ姉もこちらに気づいて起き上がり……

「ぶっ！カサ姉前！前隠して！！」

「へ？……きゃああああ！！」

なんでブラジャーしてないの！？

「やっぱりおっぱいか！おっぱいが重要なんやなああああ！！」

「はやては一体どうしたあああ！」

「司守こっち見ないでえええ！！」

その後騒ぎを聞きつけた母さんにめちゃくちや、いや、くちやくちやに怒られた。

俺が一体何をした。

第十三話 お泊まり会♪ポロリはないよ♪（後書き）

碧「流石主人公。ラッキースケベ」

司「うるせえ……あの後大変だったんだぞ」

碧「いいじゃないか、念願の暈音のおっぱいだぞ。爆乳だぞ」

はやて（以下は）「やっぱりおっぱいがええんかああ！」

司「はやてはこっちに来るなあああ！！！」

は「あ、ちょ、久々の出番やからもうちょい……」

司「九話以来だからそれほど久々じゃないから大丈夫！」

は「あたしがヒロインなんやろ！？だったら毎回出さんかアホー！」

………

司「ふう……行っただか」

碧「そんな邪険に扱わなくても」

司「はやてに汚いもの見せたくない」

碧「それってどういう意味？」

司「今回はKYでも修行でもなかったな」

碧「え？無視？」

司「今回はKYでも修行でもなかったな」

碧「え？なにこれ？ドラクエ式無限ループ？」

司「今回はKYでも修行でもなかったな」

碧「はいはい答えればいいんだろ……」。

実は次回どういいう話にするか悩んでる時にフェイトがジュエルシード渡しに行くのを思い出して、じゃあってこうなった。反省も後悔もしていない」

司「少々待たせといてそれかよ……」

碧「ドウドウ、純粋にスランプだったんだ。許せ」

司「最低ひと月二話にするって決めてなかったか？」

碧「そんな事を守る訳がなかった」

司「……………」

碧「無言でベルヴェルク向けんなよ怖い」

司「……………次回は」

碧「今度こそKY登場だ。

あ、読者の方に言っておきますがこちらの予定でKY登場シーンは劇場版から抜粋させて頂きます」

司「なんでわざわざ」

碧「……フッ」

司「おい今のは「それではまた次回」ちょっと待てやゴルアアアア  
ア!」

第十四話 原作が神だとアニメが黒歴史なる可能性が高い（前書き）

司「おいタイトルが本編と関係無いじゃねえか」

Fate/Zeroとまじ恋とペルソナ4アニメ放送記念という  
とで

司「喧嘩売ってるだろ」

んなことあない

## 第十四話 原作が神だとアニメが黒歴史なる可能性が高い

「もうすぐなのヨ!」

「分かったあ!」

学校行事やらなんやらのせいで下校するのが遅れた今この頃。

いきなしジュエルシードの反応が。

人気の無い場所でチルルと黒服を出してジュエルシードの元へ急ぐ。  
ついでにラディカル・グッドスピード脚部限定も発動中。

最終形態にしないのかつて?

いや、そこまで急じゃないし分解出来る物質が無かったし。

流石に学校の一部に大きな穴を開けるほど分解するわけにはね……?

「ちなみにフェイトとなのははもう居るのヨ」

「それを早く言えよおおお!!」

スピードup!

人に見つからないように、しかしスピード上げて目的地に移動。  
すぐにたどり着いた。

流石最速。

見た感じなんかの工場のようなだった。

夕焼けがやけに映えるな……。

「もう二人ともいるんだよな……。急がねえと……」

「もう一人来たのヨ!」

「なっ!? 誰だ?」

「知らない人なのヨ」

ちっ……マジで急がねえと。

工場の中に侵入。

するとすぐさま爆音が鳴り響いた。

数秒足らずで中心部に着くと煙の中からフェイトが。

フェイトの下へ行こうとした瞬間、煙の中からさらに青い光が

…

…

…

橘 司守

高町 なのは

…

…

…

「やめてえー！ーッ！！」

フェイトちゃんとの決着を邪魔した黒い魔導師の男の子が、アルフさんの手助けで逃げ出したフェイトちゃんを撃った。



止めてって言ったのに。

きつと煙が晴れたら、その場に倒れたフェイトちゃんがいるだろう。そんな予測を立ててフェイトちゃんを心配しながら煙が晴れるのを待った。

しかし、いざ煙が晴れると予測と全然違っていた。

代わりに赤い十二枚の円盤が、奥にいるフェイトちゃんとフェイトちゃんを撃ったとは別の黒い魔導師さんを守っていた。

「いい度胸してるじゃねえか、優男」

赤い円盤が魔導師さんの持つ柄に集まっていく。  
そしてその黒い魔導師さんの顔は、私がよく知っている人物だった。

「司守………?」

…

……

……

高町　なのは

橘　司守

……

……

…

「司守……?」

「怪我無いか、フェイト」

間一髪、ほんつとギリギリだった。

チルルの円盤が飛ばなかったから間に合わなかった。

つか俺はギリギリ間に合わなかった。

チルルを飛ばして攻撃からフェイトを守り、俺遅れて参上。

カツコ悪いな……。

いやいやそんな事どうでもいいんだ。

フェイトを守れたんだからそれでいいんだ。うん。

「誰だ君は」

フェイトを攻撃したつばい黒い少年が杖たぶんデバイスを向けながら言った。

「人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが礼儀だろ?」

「僕は時空管理局執務官のクロノ・ハラウンだ! 君が何者かしないが今すぐ武装を解除し、後ろの彼女達と共に投降するなら、安全を保証しよう」

「俺の事知りたいの? 知りたくないの? どっちなの? ったく、これだから最近のガキは」

「君の方が子供だろ! さあ、早く武装を解除するんだ!」

あーやだやだすぐ怒っちゃって。

そんなガキには……

「お仕置きが必要だな」

「! 抵抗する気か……」

チルルをクロノに向け、構える。

クロノも警戒して向けてたデバイスを盾にするように構えた。  
多分、いや確実に強いだろう。

管理局やら執務官やらどーこー言ってたから本職だろうし。

（フェイト、アルフを連れて逃げろ。どっかにいるんだろ）

（相手は管理局だ。一人じゃ……）

（俺は平気だ。いくらでも手はある）

（けど……）

（母さんの為にジュエルシードを集めてるんだろ？ だったら早く全部集めてあげな）

（！……分かった。でも無理はしないで）

俺は首を縦に振って答えた。

それを確認したフェイトはジュエルシードを回収してから空を飛び、アルフと合流した。

「逃が……ッ！」

「そうは問屋が卸さないってね」

円盤を飛ばしてクロノの動きを止める。

その間にフェイトの姿は見えなくなっていた。

「くッ……」

「逃げんなよ」

「公務執行妨害だぞ」

「知らん。魔法が流行ってない場所で威厳振りがざすな」

「君も魔導師なら知っているだろう！」

「いや、知らん。ググっても管理局の法律なんて出てこないだろ」

「ちゃんと調べろ！」

「無理だろ！ どう調べろって言うんだこの緊縛プレイマニア！」  
「はあ？ なんの……」

なのはの手足拘束してるくせに。

「ってアレは違うー！」

「へ？ 私？ きんばくぶれいって？」

ピュアなのはは知らなくていいの。  
間違っても家族に聞かないように。

「隠すなよ。変態執務官」

「違うって言うてるだろ！」

「どうせフェイトを狙ったのもあのスク水姿目当てだろ」  
「だから違う！」

そんな息を荒げてまで興奮してるのに。

「君の所為だ！」

「えっ！ まさかそういう趣味……」

「……もういい、君を重要参考人として連行する」

ねえせめて否定してよ。

狙いを俺にする目的だったからいいんだけどさ。

「ステインガレー！」

『Stinger Ray』

っていきなりかよ！

青い光が高速で俺に襲いかかる。  
チルルを盾にし青い光を防ぐと

「来るのヨ！」

その声に反応して真上に飛ぶと俺がいた場所にはバインドが表れて空を掴んでいた。

チルルが反応してなかったら確実に捕まっていただろう。  
撃った本人もそれで仕留められると思っていなかったようで、しっかりと俺を見据えていた。

「ステイン……」

「衝撃のファーストブリットオ！」

魔法を使われる前にこっちから攻撃。

『Protection』

チャージから攻撃に移るまで一秒もないこの技は見事にクロノの魔法を阻止し、防御させた。

防御させるつもりはなかったのに。

どうやらデバイスはオートで防御するらしい。

チルルに近いものを感じる。

厄介だな。

結局相殺し距離を取る事になった。

「今の技はこの間の……！」

「あの時の紫仮面さんってシズくんだったの!？」

あ、バレた。

つか紫仮面って。

紫なのは全体的に……いや、どうでもいいか。  
こっからは本気出す。

「狩猟の福音は鳴った」

円盤が俺の上に縦に円を描く。

『愛<sup>は</sup>しきやし』

「歌……？」

『すげなき汝<sup>まし</sup>にまじくじす』

クロノが警戒してか防御、または回避か反撃の準備をする。

『健<sup>すく</sup>よきのがなう騒きにね濃い』

だが防御を砕いて回避も読んで反撃する暇も与えない。

『石火の瞬<sup>まじろ</sup>ぎ』

この一撃で終わらす！

『まさやかにせん！！』

クロノもこの攻撃に気づいたのか空へ飛び離れようとする。

もう遅い。

「鋼鉄惑星<sup>フェルブランナイト</sup>！……！」

十二枚の円盤が一行に並び弧を描きながらクロノを襲う。必死に避けようとするクロノより速い速度で追う円盤は、次第に列を崩し、まるで獲物を覆うように広がった。避けきれないと悟ったクロノは円盤と向かい合い防御魔法を使って円盤を防ぐ。

しかし防御魔法が円盤を防いでいる間に残りの円盤が背後に回り込み、Uターンして再び狙いを定める。

「なっ……ぐあー!!」

遅れて反応するもクロノは攻撃をモロに受け地面に叩きつけられた。

「終わりか？」

円盤を柄に戻しワザと見下す様に倒れているクロノに言った。

「まだ……まだだ」

睨みながら立ち上がりうとするが片足はまだ膝がついたままだった。止めを  
気絶させようとチルルを振りかぶる。

『待って下さい』

目の前に急に半透明な画面と画面の中に緑の髪の女性が現れた。

これも魔法なのか……？

いやー最近の魔法は進歩してますなー、ってレベルじゃ無いんだが。

「母さ……提督！」

「提督？」

提督っつーと結構偉いんじゃない？

『初めまして、私は時空管理局提督、リンディ・ハラウンです』

「何故提督が……」

『クロノ執務官は下がって下さい』

「しかし！」

『クロノ』

「うっ……」

クロノを抑えるリンディさんは上官よりもなんだか母親のような感じだった。

「もしかして親子？」

『あ、分かります？』

「いやまあ、名字が一緒だしなんか雰囲気……」

そう答えるとそうですか、と微笑んだ。

美人だなあ。

こんな頭固そうな奴の母親とは思えないわ。

そう思ったのも束の間で次の瞬間には真面目な顔になった。

『さて……まずは名前を聞いても？』

「福本育郎。あだ名はヨンパチ」

「え、なに言ってるの司守くん？」

バーロー何早速バラしてんだよ緊縛少女。



「だからきんばくつてなに!？」

ググレカス……やっぱググレないで。

『では司守さん、出来れば我々の船で詳しいお話を聞きたいのです  
がよろしいですか?』

「その船は宇宙戦艦的なアレですか?」

『宇宙ではないですが、似たようなものですね』

くっ……ロマンが溢れてるじゃん……行きたい。

「すぐく行きたいですが遠慮します  
なぜ?」

「俺は彼女側ですから」

後ろに跳んで全員から距離を取る。

「待つて、司守くん!」

「待たない」

“朧”と書かれた一枚の布をグラントの能力で生み出す。  
その布を自分の身体に巻いて、“消える”。

「消えた!？」

「な、なんで!？」

魔道具・朧。

光を調整して透明になる布だ。

と言っても朧自体の汚れは透明にならないのだが。  
ここから去るのは十分か。

「じゃあなクロノ、リンディさん、なのは」

臍に身を包んだまま俺は帰った。

なのはは多分大丈夫だろう。

あいつらが時空管理局なら何かしら質問されてもすぐ解放されるだろうし。

今は自分の身の心配だけだ。

## 第十四話 原作が神だとアニメが黒歴史なる可能性が高い（後書き）

### チート大図鑑

【名前】

朧

【原作】

烈火の炎

【能力】

透明化

【その他】

光の屈折率を透明レベルまで弱める布

原作では暗殺や敵を翻弄するのに使用していた

しかし朧に付いた汚れは透明にならないのが弱点

司「今期で見るアニメは？」

碧「前書きの三つだろ。後は僕は友達が少ないとシーキューブだな。今更だけど星空へ架かる橋も見たい」

司「何故に」

碧「ヒロインの一人がどう見てもシグナムさん」

司「誰？」

碧「ああ、お前はリリカルの世界を知らない設定だったな」

司「設定言っな！」



第十五話 ドキドキ保健室 主人公を奪い合う女の子と男の子（！？）

「忘れてた……」

「ちゃんとお話聞かせてもらうの」

なんで普通に登校してるんだろ俺。

時空管理局が無事なのはを返したなら俺に会いに来るのは当然だろ……。

あたしって、ほんとバカ……。

「聞ってるの？」

「あーはいはい聞いてますよー」

「それは聞き流してるっていうの」

「あ、フェイト」

「えー!？」

嘘です。

なのはが一生懸命いないフェイトを探している間に臆召喚。瞬く間に透明に。

「どこにフェイトちゃんが……っていないの!？」

まだ目の前にいるよー、なんて言えるわけなので透明のまま黙って登校。

つてもまあなのはがそう簡単に諦める訳もなく、

一時間目終了。

「司守くんいる!？」

「ヘア!？」

「今度こそ教えて……」

「あ、フェイト」

「嘘!？」

「うん、嘘」

臙召喚。

「また騙されたの——!!」

二時間目終了。

「司守くんいる!？」

「ヘア!？」

「今度こそちゃんと……」

「あ」

「フェイトちゃんならいないよ。ちゃんと確認したもん」

「いや、クロノ」

「え? クロノくん?」

朧召喚。

「いないよクロノく……またなの――!!」

三時間（rk

朧召喚

「司守くん……ってもういないの!？」

昼休み

「流石にしつこいぞ」

「ならお話聞かせてほしいの」

くだいな……。

「じゃあちよつと手握って」

「? 分かったの」

にぎっ。

「おはなし!」

「……………」

なに黙ってるんだよ。

お茶の間はぼーんだぞ、木っ端みじんだぞ。

「ねえ司守くん、私本気なんだよ」

「…………それは分かる。分かるんだが徐々に力入れてないか？」

「どうしたらフェイトちゃんとお話できるか、本当の気持ちを聞き出せるか」

「それは良いことだが力を抜いてくれないか？ めっさ痛いんだが」

「頼れるのは司守くんだけなの！ お願い、フェイトちゃんのこと教えて！！」

「その台詞は一度言われてみたかったけど手を握り潰されながらは聞き取れなかった！ お手々離してえええ！！」

「いや！ そうしたら司守くんどこか行っちゃうもん！」

「それも別シュツで聞きたかったああ！！」

絶対魔法で握力強化してるだろ！

痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！

手が握り潰されるう！！

「あ、こんなところにいた」

「なのはちゃんもうお昼食べちゃった？」

「アリサちゃん、すずかちゃん」

手の力が弱まった！

今がチャンス！

「脱出！」

「あ！」



「ありがとうアリサ、今は君が天使に見える！」

「うわキモ！」

「ぶっ！！！」

司守は めのまえが まっくらに なった。

「知らない天井だ……」

「司守くんって保健室来たことなかったっけ？」

ああ、保健室か。

あんまり来たことないや…… って

「なぜに？」

「司守くんが逃げたらアリサちゃんの右ストレートが直撃して気絶したから、わたしが運んだの」

アリサエ……。

「納得。どつりで右手が温かいわけだ、看病ありがとう。手を離してくれ」

「いやなの」

「なのは、言うこと聞きなさい」

「お母さんみたいに言ってもダメなの」

くそう……。

結局俺はこの魔の手からは逃れられないのか……。

「お願いだからお話を……」

「話はこつちで聞かせてもらおう」

「え……？」

なん……だと……？

何もない所からクロノが。

なにこれこわい。

もしかしたら入浴中に突然クロノが現れる可能性も……。

「きゃー、クロノさんのえっち！」

「なんの話だ？」

「どうしてクロノくんが……」

「悪いが君を解放した後、サーチャーで監視させてもらった」

マジでエロかった！

なんかこつち来たあ！！

「くたばれ覗き魔！！」

「ぶっ！！」

渾身の左ストレート！

無様な悲鳴を上げてクロノは気絶した。  
ざまあ。

「クロノくん！？」

手の力が弱まった！  
今がチャンス！

「今だ！」  
「逃がさないの！」

出口まで後数歩の所で身動きがとれなくなる。  
よく見ればピンク色のバインドが身体を締め付けていた。  
つまりは脱出失敗。

「ウソダンドコードーン！」  
「お話、聞かせてもらおうの」

COOLになるんだ俺！

この状況をよく考えればきつと脱出出来るはずだ。

まず今俺は扉の数十センチの所でバインドに動きを止められている。  
足は動くが上半身がまるで空間に張り付けられた様に動かない。  
手首と首も動くからなんとか後ろのなのはの様子も分かる。  
さっきまで俺が寝ていたベッドの横にいる。

その足下に倒れてるクロノは無視してなのはは動かない。  
多分警戒しているのだろう。

時間は四時半。  
とつくに下校時間だ。  
さてどうする。

バインドを発動させてるのはなのはだから気絶させれば早いんだけど……。

女の子に乱暴するのねえ。

「お願い。フェイトちゃんのこと聞かせて」

……しかたない、気絶させるか。

「なのは、言っておきたいことがある」

「なに？」

「ネギトロのネギは野菜のネギって意味じゃなくて

」

バリイイイイン！！！！

「きゃああああー！！」

「のわあー！！」

急に保健室の窓ガラスが割れ外から電撃が保健室の約半分を襲った。  
その衝撃でなのはは気絶。

クロノはなんかビクンビクンしてる。無視しよう。

「司守、平気！？」

「フェイト？」

割れた窓からバリアジャケットを着たフェイトが現れた。

「どうしてフェイトが？」

「ジュエルシードを探したら魔力反応があって、来てみたら司守が捕まってたから……あと管理局の魔導師もいたし」

なのはとクロノを見る。

二人とも気絶しているが涙目である。

なのははクロノがいなければ少なくとも電撃はなかった訳だし、クロノに至っては気絶中に感電。

あ、学校も涙目か。  
なんともいえねえ。

「司守は怪我なかった？」

「ああ、まあありがとう、フェイト」

「このままじゃ誰か来るし……よかつたら、家来る？」

なに頼染めながら素敵な言葉を言ってるの？  
萌えるじゃない。

しかもその姿だと余計に……こう……ね！

「じゃあ、お願いしようかな」

「なら早速行こう。アルフにも連絡しておくね」

「でもジュエルシードはどうすんだ？」

もともとそれ目的だったわけだから手伝うならまだしも中断させる  
となると後味が悪い。

「また夜か明日にやるよ。司守には助けてもらったしね」

そう言って手を取るフェイト。

ずいぶんナチュラルに手を握りますな。

されだけ好感度が上がったのか。

そしてそのまま割れた窓に近づく。

「つと、ちよつと待て」

手を繋いだまま臍をフェイトに被せる。  
その後もう一枚臍を生み出し被る。

「え！？ 司守が消えた？」

「フェイトも同じだからな」

「え……ほ、本当だ……なにしたの？」

「んー……ま、俺の魔法つてことで」

「稀少技能レアスキルつてこと？」

「なにそれ美味しいの？」

「食べ物じゃないんだけど……後で説明するよ」

離すとどこにいるのか互いに解らなくなるので手を握ったまま飛行。

にしても見えないものに手を引かれるって結構怖いんだな。

相手がフェイトって分かってるからいいけど。

引かれるままに移動しているといつの間にか街に入っていた。

朧のおかげで下にいる人達から見えないので、気にしなくてもいいのだからんだか悪い事してる気分。

え？ 悪い事してるって？

ちよつとよく分からないかな。

管理局？ ジュエルシード？ 知らないな。

無数のビルの一つの屋上に降り立つ。

自分の足も見えないので若干苦労した。

「ここが私達の拠点。結界が張ってあるからもう大丈夫だよ」

なら一安心。

朧を脱いで手足を伸ばす。

「えつと、この布？ を外せばいいの？」

「ああ、そうだ」

フェイトも臙を脱いで姿が見えるようになる。

その後臙を返してもらい、バリアジャケットを解除した。

フェイトを先頭にしてビルに入ると、無数の部屋の中からから一つの部屋に案内された。

「お帰りフェイト」

「ただいま、アルフ」

「司守もいらつしゃい」

「お邪魔しまーす」

部屋の中にはアルフがいた。

椅子に座りながらドッグフードを食べているのには突っ込んだ方がいいのか？

「適当に座って」

と言われたのでとりあえずアルフの隣に座る。

「あげないよ」

「いらん」

人間は好き好んで食べないぞ。

アルフがどんな種族なのかは知らないが。

耳と尻尾があるから少なくとも人間じゃないよな。

改めて部屋を見る。

正直かなり広い。

テレビが遠くに見えるし。

こんだけ広いと逆に大変そうだよな、家事。  
ちゃんと二人でしてんのかな？

……率先して掃除するフェイトに面倒くさがってもしっかり付き合うアルフを想像したら自然と頬が緩んだ。

「どうしたんだい？」

「いや、二人つて姉妹みたいだなーって思ってた」

フェイトが姉でアルフが妹だけど。

一見デコボコだけど、しっかり者の姉にやんちゃで姉思いの妹。  
理想的な姉妹だと思う。

「姉妹、ね。だったらフェイトが姉であたしが妹つてところだね」

「自覚あつたんだな」

「まーね。何だかんだでしっかりしてるからね、フェイトは。今回だつて……」

そこでアルフの顔が急に暗くなった。

「どうした？」

「べつに。あー、お腹いっぱいになったら眠くなっちゃったよ。ちよつと寝てくる」

ドッグフードを机に乗せてアルフは出て行ってしまった。

「あれ？ アルフは？」

「なんか寝るって」

机の方へ座り直す。

お盆の上にティーカップを乗せたフェイトには突っ込んだ方がいい



のか？

ティーカップの一つが目の前に置かれる。

「ごめんね、本当はお菓子とか出した方がいいんだろっけど、そういうのって買わないから」

「なんのなんの」

せつかくのご好意なので一口飲む。

本当は紅茶って苦手だけど飲めなくもない。

そういう場合は我慢しとくのが日本人のびっ……

「リンゴジュース……だと……？」

「あ、嫌いだった？」

「いや、普通に好きだけど」

お盆とティーカップとリンゴジュースって何かおかしくね？

あれか、まだ日本慣れしてないんだな。

もしかしたら別の世界の生まれかもしれないから地球慣れすらしてない可能性もあるが。

まあ後は稀少技能やら日本での生活やら話してたら七時になっちゃった

「すいません、ホントすいません連絡忘れてました。……え、ご飯はまだだけど……すいません、すぐ帰ります」

こっぴどい怒られました。

当然だよー。小学生がこんな時間まで無断で外に出てたら普通怒

るわ。

ちなみに電話はフェイトの家のを借りました。

「という訳だから帰るわ。電話ありがとう」

「ううん、むしろごめんね、こんな時間まで引き止めちゃって」

「管理局には気をつけるんだよ」

「分かってる」

いざというときはなんか出して逃げるからな。

最後に二人に手を振って部屋を出た

戻ってきた。

「どうしたの？ 忘れ物？」

「それは多分平気だ。ただ聞きたいんだが……」

「なにを？」

「出口ってどこだ？」

せめて屋上を教えて……。

碧「臍が有能過ぎる件について  
多分これからは出ないと思います」

司「本当に？」

碧「たぶん、きっと、おそらく、めいびー」

司「怪しいな……」

碧「でもこれからは戦闘が増えてくるから、少なくとも出番は減るぞ」

司「うへえ……マジかよ」

碧「では今回はここまでで〜」

碧「zeroのバーサーカー戦が格好良すぎる件について」

司「どうでもよいわ！」

## 第十六話 シリアス回はネタが出来ない(前)

「あああああ！ また消えたあ！！ どうして？ 何で！？」

「はあ、またか……」

次元航行艦アースラ。

時空管理局が所有する船艦の内部の一角で、二人の男女がモニターを眺めている。

「せっかく透明化に気付いて対策考えたのに！」

「考えてる間に別の逃走方法に変わってたか……失敗したな」

「なにこれ！？ 影の中に入るレアスキルなんて聞いたことないよ！」

「落ち着け、エイミー」

「これが落ち着いていられるかー！！ 私の睡眠時間返せ！！」

エイミーと呼ばれた少女は手足を伸ばして大声で叫んだ。

彼女はモニターの少年 橘司守がなぜ急に消えるのかに真っ先に気付いた。

それはレアスキルによる自身の透明化。

彼はレアスキルと呼ばれる通常の魔法とは別の特殊な固有技能により、管理局に気づかれずにその場から離脱したとエイミーは考えた。それに対する試行錯誤を睡眠時間を削ってまで行い、やっと完成し導入した瞬間、彼は別のレアスキルによって痕跡を消したのだ。そりゃ叫びたくなる。

「これはもう諦めた方がいいでしょうね」

「艦長、私の努力を水の泡にするつもりですか？」

「そうは言いません。しかし、また対策を考えるより、残りのジュ

エルシードに専念した方がいいでしょう」

「艦長の言う通りだ。無いだろうが、また別のレアスキルを使われ  
たら黴ごっこにしかならない」

「クロノくんまで……。もう、分かりましたよ。残り六個のジュー  
エルシードの探索を優先しますっ！」

納得していない様子でエイミーはモニターに向かった。

しかめっ面のエイミーをその場にクロノはこの船の艦長であり、自  
分の母であるリンディ・ハラウンに近づく。

「艦長、彼の事です……」

「司守さんね……なのはさんの話を聞く限りいい人そうだけど」

「あまり感情移入されては困ります。事件の主犯の一人なんですよ  
？」

「分かっています。だからこそ、エイミー執務官補佐を中心に技術  
者の方達に彼の追跡を指示したのです」

司守はクロノと学校で接触した後も学校へ通い続けていた。

ならば彼の後を追えばフェイトと一緒に逮捕出来るのではないか、  
と考えたのだが実際はそう上手くいかない。

毎日登校していても学校にいる間しか彼を追跡できないのだ。

サーチャーで彼を見ているもいつの間にか学校におり、下校時も目  
の前で消える。

とどのつまり、学校内でしか彼の様子を見ることは出来ないのだ。

数日費やした対策もたった今失敗したばかり。

後はフェイトとアルフと呼ばれる使い魔と出て来た時に現行犯逮捕  
するしかない。

もつとも、それも難しいのだが。

いくらなのはとユーノがアースラに泊まってまで協力してくれると  
はいえ、こちらに自由に動かせる熟練者はクロノ一人だけ。

それ以上は戦力過多になりかけない。

対してあちらは子供とはいえ熟練者一人にその使い魔と変幻自在の  
レアスキル持ち。

勝ち目は薄い。

残るジュエルシールドは六個。

フェイト達が八つで自分達は七つ。

相手より早くジュエルシールドを封印しなければ

「艦長！」

エイミーが大声でリンディを呼ぶ。

先ほどの叫びとは違う、切羽詰まったような声だった。

「どうしました？」

「例の三人が出現しました！」

「なんだって？」

「モニター、写します」

他のモニターより一際大きいモニターが開くと、海を目の前に二人  
の男女と一匹の獣が宙に浮いていた。

...

.....

.....

クロノ・ハラオウン

橘 司守

.....

…  
…

遊んでいた子供達が帰り、静かになりつつある公園。

無数に生えている木の一本の影が途中から手で紙を破るように離れ、その影は少年になった。

「便利だな、これ」

少年      司守の手には三本の爪が乗せられた『影』とかかれた玉があつた。

玉の名前は影界玉。

影から影へ移動したり、遠く離れたものを見る事が出来る魔道具。影そのものを操る事は出来ないが便利な魔道具である。

「陽炎ママが愛用するのも納得だな」

本当は今日も臙で監視をやり過ごそうかと思つたんだが、臙は姿が消えるだけなのだ。

無いと信じたいが魔法モノのストーリーには大抵、溢れ出る魔力で後を追うなんて芸当がある。

そんなものに臙を使つても意味無い。

まあ、すでに使われてたらそれこそ意味無いが。

だが、あの日以来管理局が現れないのが使われていない証拠だから大丈夫だろう。多分。

影界玉を消してフェイトとの約束の場所へ向かう。

数日前、ジュエルシードを回収した後フェイトがこんなことを言い



出した。

「だいたいジュエルシードも集まってきたね」

「全部で八つか……後どのくらいだ？」

「多分六個ぐらいかな。後は管理局……あの子が回収したと思う」

あの子ってのは恐らくなのは事だろう。

なのはもフェイトの事気にしていたし、フェイトもなのはに会った  
び何か思うように見てるし。

「ちなみにその六個もだいたい見当ついてるよ」

「お、マジか」

「うん、だから管理局の邪魔が入らないうちにしようと思うんだけど……今週の金曜日でいいかな」

「ああ、平気だ」

はやてとの約束も無いしな。

「じゃあ、金曜日に。それまではゆっくり身体休めて」

「了解」

つてな事があり今日、つまりは約束の金曜日に至る。

そんなことを思い出しながら公園の中の林を進んで行くと、丁度海  
が見える所でバリアジャケット装備のフェイトと宝石が生えた赤毛

の大型犬が待っていた。

「遅かったね」

「犬が…喋った……？」

「犬じゃない！」

赤毛のワン公はみるみるうちにアルフに。

「アルフって犬だったのか」

「だから違うつて言ってるだろ！ 狼だよ、あたしは！」

「似たようなもんだろ」

「違う！」

「二人とも、そろそろ」

フエイトの声で司守とアルフは黙る。

二人から距離を取り、自分のバリジャケットを着て右手にはいつもとは違う、蟲の様な籠手を生み出した。

いや、それを籠手と呼ぶには冒涇にも等しい。

自らの意志を持ち、その脚その尾で司守の腕に抱きつく。それは間違い無く生きていた。

『……よもや、ワシを呼ぶとは思わなかったぞ』

蟲と呼応する様に一匹の獣も現れた。

鋭く太い角を持ち背中 of 全てを覆うほど長い体毛。

どの生き物にも当てはまらないその獣は、最高傑作とうたわれた一匹だった。

名を『雷神』

使用者を道具として使う凶悪な魔道具だ。

『クツクツクツ……ワシを使うほどとは思えんが、その身存分に使わせて貰うぞ?』

「ざけんな。誰がてめえなんかに身体渡すか」

『なに……?』

「俺はお前に身体を預けるつもりはない。このまんまで使われてろ」

俺と雷神が睨み合う。

雷神は明らかに殺気をぶつけている。

殺気慣れしていない俺は正面から受け止める。

同じく殺気慣れしていないとはいえ戦闘経験豊富なフェイトやアルフですら、真正面から受けたら微塵も動けないほどだった。

体感時間では十数分たったと思えるほど二人は睨み合っていた。そして、

『よいだろう。その小娘と子犬とどこまでやれるか見させて貰おうか』

そう告げて雷神は消えた。

肺に溜まった二酸化炭素を思いつきり吐き出す。後から冷や汗がジワジワと皮膚から流れ出した。

「司守、今のが……」

「そ、あれの力の一片を使って強制発動させる」

今日の約束をした後に念話で作戦会議もしたのだ。

数時間による話し合いで決まった作戦は至ってシンプルだった。

まず俺が高エネルギーの塊をジュエルシードがあるとされる海へ放つ。

ジュエルシードが暴走した所をアルフが抑えて、その間にフェイトが封印するというものだ。

そのために用意したのが雷神だ。

広範囲かつ高威力。その条件を満たすのはたくさんあったが、雷神を選んだのはあくまで道具だから負担が一番小さいからだ。最も雷神に使われれば負担は大きい。

「さて、準備はいいか？」

「うん」

「まっかせな！」

アルフは狼状態に戻っており、フェイトもデバイスを握る手に力が入っていた。

三人は魔法で飛び、俺とフェイトは沖まで行き、アルフは二人より後ろで止まった。

自分達も止まり、大きく息を吸う。

大丈夫、いける。

二人の為にも今回は必ず成功させなければならない。

雷神がある右手を海に向ける。

「……狂雷」

雷神から放たれた無数の雷は怒り狂うが如く、海を覆った。

雷は八つ当たりのように海へ降り注ぐ。

雷が落ちた周囲の魚などはとくに死んでいるだろう。しかし仕方がない事だと割り切り雷を注ぎ続ける。

すると反応はすぐに現れた。

眠っていたジュエルシードは天候を崩し、それぞれ海を巻き上げ竜巻を作り上げた。

その数六つ。丁度残りのジュエルシードの数と一致する。

「アルフ！」

「分かってる！」

アルフの足元に橙色の魔法陣が現れる。

魔法陣の中から更に六つの鎖が現れ、竜巻を締め付けた。

畳み掛けるようとフェイトが竜巻に近付こうとする

が、如

何せん風が強すぎてバランスが取れない。

やや離れた所にいるアルフは平気そうだが、中心に近い場所にいる

俺とフェイトは動こうにも動けなかった。

ジュエルシードの力を舐めていたかもしれない。

一つ一つは対処出来る程度だったが、複数集まった威力は計り知れないものだった。

『存外苦戦しているではないか、主よ』

唐突に目の前に雷神が現れた。

『どうする？ ワシに使われればどうにかならんでもないぞ？』

雷神の口角が歪む。

雷神に使われるということは生命力と身体を自由を奪われるということだ。

しかしこの状況を打開するにはそれしかないかもしれない。

アルフはジュエルシードを止めていて、フェイトは封印をしようにも出来ない。

だが俺が雷神に使われれば事態は一変する。

……後は、任せるしかない。

「雷神……体内への侵入を……」

「フエイトちゃん！ シズくん！」

その時、風や雨が荒んでいるなか確かに聞こえた。  
久しく聞いていない友達の声を

## 第十六話 シリアス回はネタが出来ない(前)(後書き)

### チート大図鑑

#### 【名前】

影界玉

#### 【原作】

烈火の炎

#### 【能力】

影から影へ移動

離れた場所を見る遠目

#### 【その他】

密室であつても影さえあれば脱出し、遠目によって相手の様子を見ることが出来る便利な魔道具

これ自体には戦闘能力は無いが策略に長ける者が使えば非常に強力  
原作では主人公の母親である陽炎が使用

本人がくノ一で知略や体術に優れているので、敵の影へ移動後瞬殺  
とさり気なく活躍している

余談だが助けた子狐に懐かれる陽炎ママ可愛い

#### 【名前】

雷神

#### 【原作】

烈火の炎

#### 【能力】

雷の操作

生命力を吸い取られることにより雷の強化

#### 【その他】

魔道具の制作者の一人、海魔が作った最強の魔道具

海魔が殺戮を目的に魔道具を作っていた為凶悪な性格になっている  
見た目はグロテスクな蟲

尾のようなものを使用者に刺して生命力を吸う

意志ある魔道具はあるがその中でも珍しくもう一つ姿を持つ

他の姿を持つ魔道具は対となる風神以外作中では明らかになっていない

しかし使用者を逆に使う雷神は最も珍しいだろう

碧「魔道具無双な件について」

司「結構便利なの多いしな。後お前烈火好きだし」

碧「よせよ照れる」

司「どこに照れる要素が」

碧「個人的には火影より麗のメンバーの方が好きだったり」

司「聞いてねえよ」

碧「では本編の話して……実は前編後編分けるつもりは無かったのですよ」

司「じゃなんで」

碧「それが書いてたら結構長くなりそうだったんで急遽こういう形に」

司「そのままだったらどんぐらになったんだ？」

碧「多分七ページは行くかと。一話三、四ページぐらいでいきたいんだよね、俺」

司「あー……なるほど」

碧「後編は近いうちに上げる予定です」

司「楽しみにしてる人はいないと思うけどお楽しみに」

碧「オイコラ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5627t/>

---

魔法少女リリカルなのは 転生した少年は少女達を護る

2011年11月17日20時22分発行